

松本市下神遺跡

—県営ほ場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書—

1989・3

松本市教育委員会



笛賀地籍(SKS) 発掘地点全景 型々年からこの調査地右隣りで長野自動車道の調査が行われた。



同 上 10住、溝4周辺

昭和58年度の調査(1)



南田尻地籍(SKMT) 調査地全景



熊坂地籍(SKKS) 10住

この住居から、奈良三彩が出土

昭和58年度の調査(2)



中道地籍(SKNM) この後、造構掘り下げを行わず埋め戻した(本書第2章参照)。



同上 北西部 左隅に建9、3・4住左に建10(総柱)、9住右に建6・5と続く

昭和58年度の調査(3)



中道地籍(SKNM) 北半部

中央部右の掘り方群は建2~6の切り合い。



同上 反対側から見たところ。6住煙道先端にはピットを伴う。



中道地籍(SKNM) 中央部

中央右側は建2～6の切り合い。左側は建7・8。



同上 西端部

11住に切られて建1（2×3間、側柱）がある。

昭和58年度の調査(5)



中道地籍(SKNM) 北部

測量風景。残されたのはこの全体図と数10枚の写真。

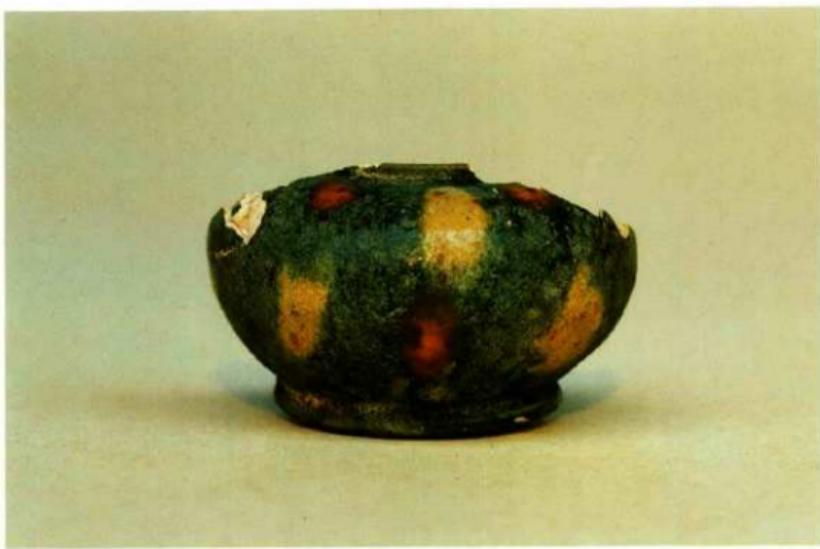


同上 南部 中央は建8。3×3間の縦柱で一边8mという巨大なもの。

昭和58年度の調査(6)

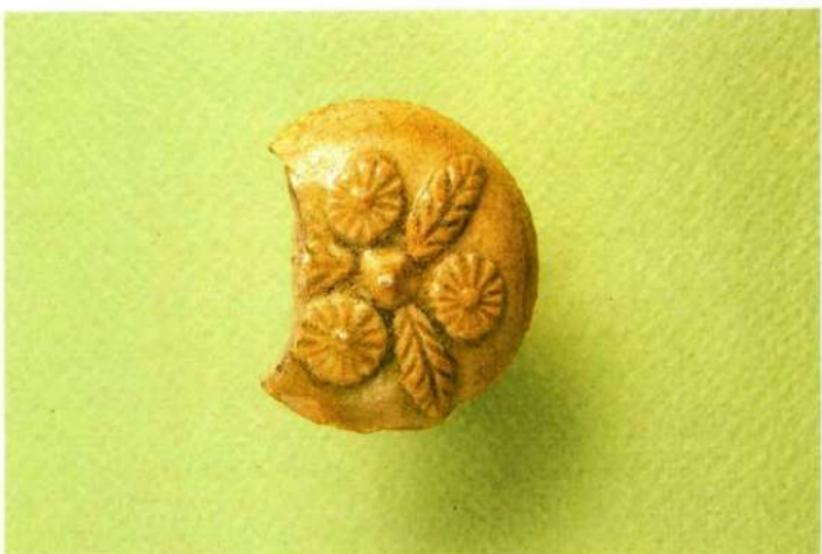


奈良三彩出土状況 熊坂地籍 10住床より出土

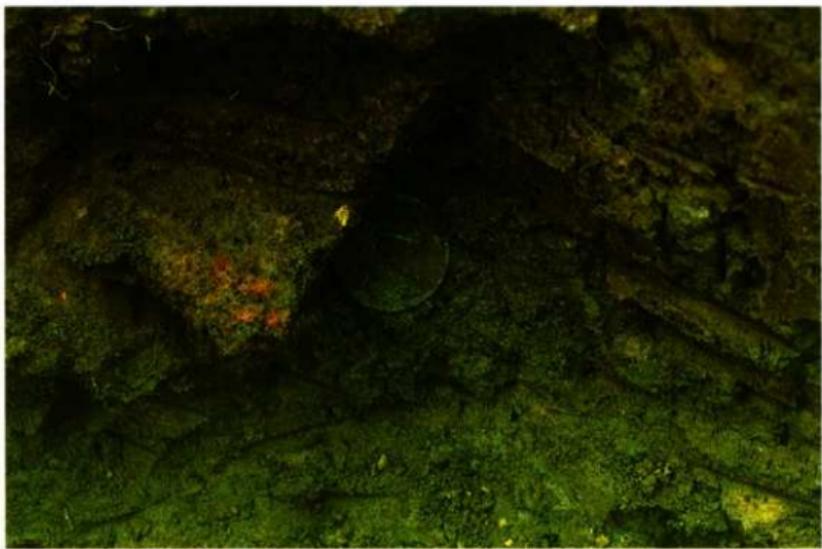


同上 奈良三彩 小型の短頸壺で、器高3.7cm。胴部上半1/3欠損。

昭和58年度の調査(7)



土壤20出土、古漸戶合子蓋



土壤20、西壁古錢出土狀況

序

神林地区は松本市の西南部にあたり、奈良井川と鎮川に囲まれた平坦で肥沃な穀倉地帯として知られていますが、また、古代からの遺跡が点在するところもあります。特に下神遺跡は松本市教育委員会による前回の調査で、多数の古代住居跡とともに至宝とも言うべき奈良三彩の壺が発見され大いに世の注目を集めた遺跡でありました。折から進行中の県営ほ場整備事業のため、長野県松本地方事務所からの委託を受けて松本市教育委員会がこの重要な遺跡を、再度調査することとなったわけですが、一方、今回の調査は昭和58年より続いてきた神林地区の県営ほ場整備事業に伴う発掘調査の最後のものとなりました。

発掘調査は10月中旬から11月の下旬にかけて実施し、幾多の成果を収め無事終了しました。下神遺跡の古代集落の西の境がわかったことや、今までになかった中近世の遺構の発見など、新しい所見があったことは本書に記すとおりです。

この下神遺跡の発掘調査は、当市教育委員会だけでなく長野自動車道の建設に伴って長野県埋蔵文化財センターによっても大規模に行われ、多大な成果を私どもの眼前に示してくれました。莊園名と見られる字を記した土器の発見などは、驚くべきものでした。当市教委の蓄積した資料も一緒に合せ見たとき、この地域の古代史研究に大きな貢献を為す遺跡であり、発掘であったといえるでしょう。

最後に、今回ならびに以前の調査の実施にあたり多大な御理解、御協力をいただいた神林土地改良区、また甚大な御援助をいただいた神林公民館、出張所及び地区の皆様に心より謝意を表し、さらに地域の一層の文化財保護の機運が高まるることを願い序といたします。

平成元年3月

松本市教育委員会教育長 中島俊彦

例　　言

- 1、本書は、昭和 63 年 10 月 17 日から 11 月 22 日にかけて行われた松本市神林に所在する下神遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2、本調査は、昭和 63 年度県営は場整備事業神林地区に伴う緊急発掘調査であり、松本市が長野県松本地方事務所から委託を受け、松本市教育委員会が実施したものである。
- 3、本書の執筆は、以下のとおり。

第 1 章：事務局 第 2 章第 1 節：太田守夫

第 3 章第 3 節 1-(2)・(3)、2-(2)・(3)：神沢昌二郎

第 3 章第 3 節 2 石器一覧表：関沢 聰 その他：直井雅尚

- 4、本書の作成にあたり、作業分担は次のとおりである。

土器接合・復元 五十嵐周子

土器実測・製図 岩野公子

鉄器実測・製図 神沢昌二郎

石器実測・製図 赤羽包子

遺構図整理・製図 石合英子・永沢周子

- 5、遺物の写真撮影は宮嶋洋一氏にお願いした。

- 6、本書の編集は事務局が行った。

- 7、本書に掲載した図類の縮尺は基本的に次のとおり。

各遺構の平面図 1 : 60

土器・陶器の実測図 1 : 4 (小品 1 : 2)

鉄器・古銭の実測図 1 : 2

石器実測図 打製石斧 1 : 3、砥石 2 : 3

- 8、本書作成にあたり石器について望月 映氏（長野県埋蔵文化財センター調査研究員）の指導・協力を得た。記して感謝する。

- 9、本調査に関する事務書類及び測量図面類、写真、遺物、実測図などは松本市立考古博物館が保管している。

目 次

序

例言

目次

第1章 調査経過

第1節 事業の経緯と文書記録	5
第2節 調査体制	5
第3節 調査日誌	6

第2章 遺跡の環境

第1節 地形と地質	7
第2節 歴史的環境	9
1 周辺遺跡	9
2 下神遺跡の過去の調査	13

第3章 調査結果

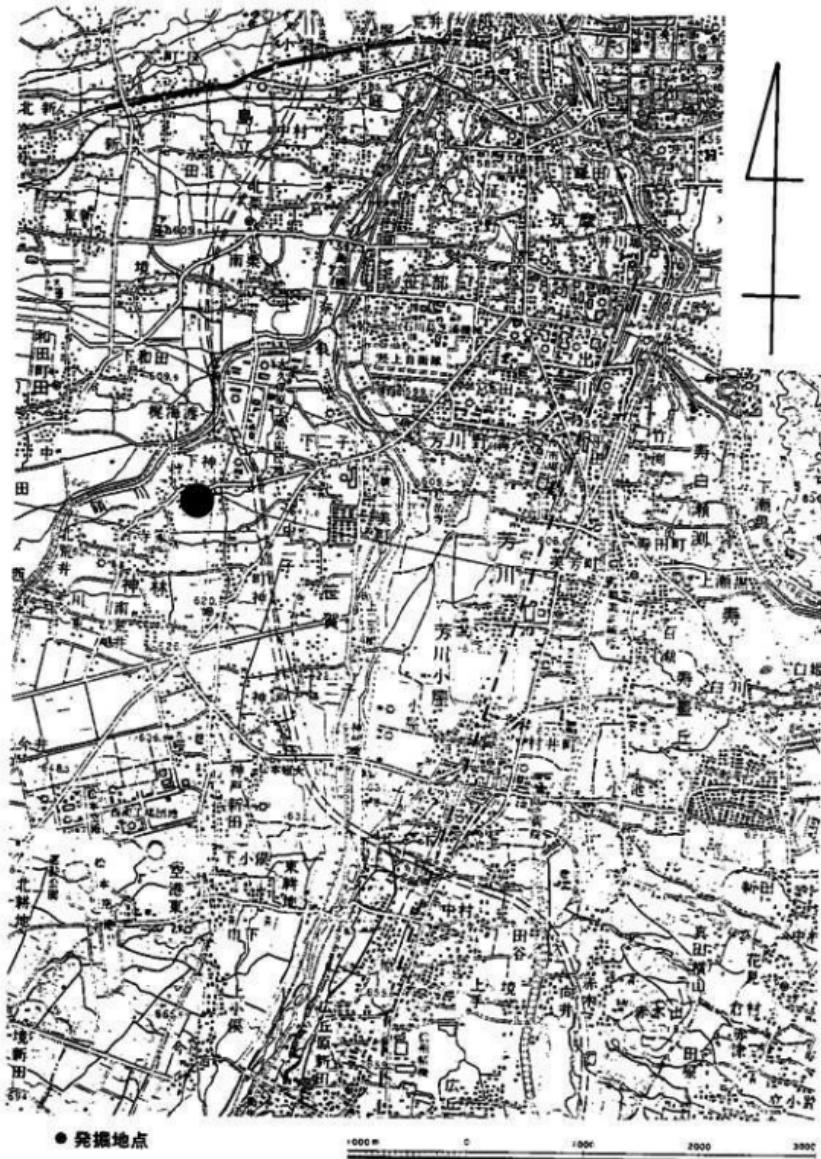
第1節 調査の概要	15
第2節 遺構	19
1 住居址	19
2 土壙	19
3 穫穴状遺構	30
4 溝址	31
第3節 遺物	
1 住居址出土の遺物	31
2 土壙出土の遺物	31
3 檜出面出土の遺物	32
第4章 結語	36

図 目 次

第 1 図 遺跡の範囲と調査地の位置	4
第 2 図 地層断面	8
第 3 図 周辺の地形と調査範囲	10
第 4 図 周辺遺跡	12
第 5 図 1 地区全体図	16
第 6 図 2 地区・3 地区	17
第 7 図 住居址	18
第 8 図 土壌(1)	20
第 9 図 土壌(2)	21
第 10 図 土壌(3)	22
第 11 図 土壌(4)	23
第 12 図 土壌(5)	24
第 13 図 土壌(6)	25
第 14 図 土壌(7)	26
第 15 図 竪穴状遺構	30
第 16 図 出土土器・陶器	33
第 17 図 鉄器・古銭	34
第 18 図 石器	35

表 目 次

第 1 表 土壌一覧表	27
第 2 表 鉄器・古銭一覧表	33
第 3 表 石器一覧表	35



● 発掘地点

0 500 1000 1500 2000 2500

第1図 遺跡の範囲と調査地の位置

第1章 調査経過

第1節 事業の経緯と文書記録

- 昭和62年 9月7日 昭和63年度埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本地方事務所、松本市教育委員会。
- 12月21日 昭和63年度補助事業計画書提出。
- 昭和63年 4月27日 昭和63年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。
- 6月14日 昭和63年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。
- 6月21日 昭和63年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。
- 8月25日 昭和63年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。
- 10月2日 下神遺跡埋蔵文化財発掘調査の通知提出。
- 平成元年 2月9日 下神遺跡埋蔵文化財取得届及び同保管証提出。

第2節 調査体制

調査団長	中島俊彦（松本市教育長）
調査担当者	神沢昌二郎（松本市立考古博物館館長）
現場責任者	直井雅尚（社会教育課主事）
調査員	太田守夫（地質）、土橋久子（考古）
事務局	浅輪幸市（社会教育課長）、田口勝（文化係長）、熊谷康治（主査）、降旗英明（主事）、山岸清治（事務員）、三沢利子
調査協力者	石川末四郎、大出六郎、大谷成嘉、大塚袈裟六、岡部登喜子、小沢泉、金子富人、上条茂子、川上典子、北沢達二、小池直人、小林謙次、小林文子、五味統一郎、瀬川長広、袖山勝美、曾根原令子、高桑弘子、田口吉重、武井縁、田多井うめ子、田多井亘、田中泉造、鶴川登、直井スガ子、中島新嗣、中村あき子、中村安男、林昭雄、藤本嘉平、丸山久司、丸山誠、丸山よし子、三沢元太郎、宮沢利男、宮島みつ代、村山正人、望月佳代子、百瀬弘子、百瀬二三子、矢島利保、米山明子

第3節 調査日誌(抄)

昭和63年10月17日(月)曇時々雨

調査地区設定、調査開始準備。

10月18日(火)雨時々曇

重機(パワーシャベル)による1地区表土除去開始。発掘器材搬入。

10月21日(金)薄曇

重機による表土除去継続。人力による堆土整理・遺構検出開始。

10月24日(月)曇、寒い

重機(パワーシャベル)により2地区、3地区を開ける。遺構検出継続。

10月30日(日)快晴、朝は濃霧

遺構検出作業。わからない箇所はサブレンチをいれる。測量用の基準点を打つ。

11月1日(火)快晴

土壤・ピット掘り下げ開始。

11月15日(火)快晴

太田守夫調査員による地形地質の調査。調査区南部から竪穴住居址検出。

11月16日(水)晴

竪穴住居址掘り下げ。土壤・ピット平面図測量仕上げ。

11月21日(月)晴

竪穴住居址掘り上げ、写真撮影。調査地全景写真撮影。

11月22日(火)曇

発掘器材撤収、後片づけ。

平成元年1月16日(月)晴

整理作業開始。

第2章 遺跡の環境

第1節 地形と地質

1 遺跡の位置と地形

下神遺跡は、松本市神林下神集落の南東部、屋敷地に開まれた水田域にあり、標高 615 m、傾斜北東へ 10/1000 の地形面上にある。地形面は鎮川による扇状地性堆積（氾濫原）である。現在の鎮川は遺跡の西ないし北西 500 m を流れているが、すでに松本市文化財調査報告 No.29 で述べたように、神林地区一帯は過去の流路の移動とともになう堆積地形である。

したがって本遺跡および周辺は、現河床の影響よりも旧河床の影響の方が大きく、流れと堆積の方向は N 40°～60°E が一般的である。特に本遺跡および周辺は、扇状地の最末端にあるため、堆積層に変化が多くなり、堆積した砂礫層や土層は上流へ連続することが少ないのである。

堆積層は一般に上部から、

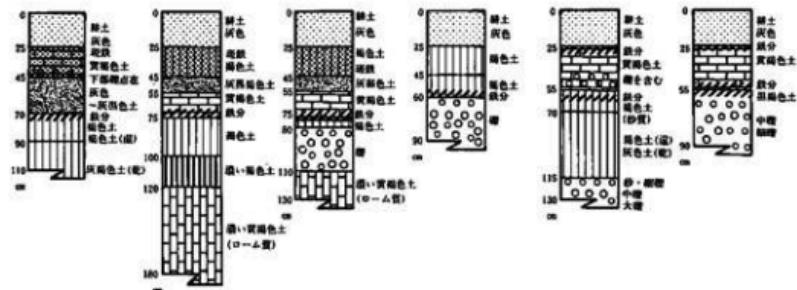
- | | |
|-----------------------|----------------------|
| ① 黒灰色の耕土（水田 20～25 cm） | ② 灰色土の溶脱層（10～20 cm） |
| ③ 黄褐色土層（斑鉄をもち 20 cm） | ④ 濃褐色土の集積層（20～30 cm） |

以下疊混じり土層、あるいは黄褐色～褐色粘土質層（ローム質）が砂礫層にいたるまで続く。黄褐色～褐色粘土質層は厚さ 40～60 cm で、1 m を越えるところもある。集積層の鉄分は、梓川系統の新村・島内・島立ほど顕著ではない。遺跡・遺物の包含層は、多くの場合黄褐色～褐色粘土質層である。

2 遺跡の堆積層と礫

本遺跡の堆積層は発掘面や地層断面によってみると、地表から -25～30 cm が現在の耕土（水田）で、その底に鉄・マンガンの沈着が起っている。さらに -60 cm までは、灰黑色土が斑鉄を含む黄褐色～褐色土の土層が続き、この底にも 10 cm 前後の褐色ないし黒褐色の鉄・マンガンの集積層がみられる。集積は特に著しいものではないが、このように上部と下部に鉄・マンガンの沈着ないし集積層があることは、土層の形成環境にも関係をもってくる。不整合と考えれば、現在の耕土より以前の耕土があったことになる。しかし今回は調査の範囲が限られているため、そこまでは連続できない。

本遺跡内の礫層は、前述の土層内には介在がなく、-40～50 cm の間に礫として点在するに過ぎない。-60 cm を越えると土層中に礫層が介在し、土層と対応を示すようになる。礫層の堆積（流れ）の方向は N 40°～60°E とみられる。



第2図 地層断面

この礫層は、1地区発掘面（地表-60 cm）では南側に広がり、発掘面の1/3を越える面積を占めている。堆積（流れ）の方向はN 60°Eとみられ、礫層の厚さはへりで10 cm、中心で30 cmないし30 cm以上である（断面図4）。同じような状態は発掘地の北の2地区でみられる。底面（地表から-55 cm、面積5.5×7.0 m）の2/3近くを覆う礫層の広がりは、堆積方向N 40°E、厚さ45 cmを示している。断面図の3・4・6からも分かるように、同じ頃の堆積層とみられる。

さらに2地区では、この礫層より下部の礫層と思われるものが、底面下にみられる（断面図5）。その上部は砂・細礫で、下部は中・大礫となる。上記の礫層と深さが対応する土層下であるので、堆積的には階級の差があると考えられる。

1地区と2地区（この間は約20 m）の間は断面図1や2が示すように、厚い土層が広がっているとみられる（あるいは一条くらいの礫層がこの間に存在するかもしれない）。また2地区的礫層の北にも厚い土層が広がっている（断面図5）。

これらの礫層は、土石混じりであること、厚さが薄いこと、土層に浸食のあとがないことなどから考えて、長期の流れでなく、短期あるいは一時的な堆積と思われる。したがって同じ深さにおける土層とは、同時異相のように考えられる。

礫層を作っている礫は、鎮川系統（中・古生層）の砂岩・硬砂岩で、わずかにチャートが混じる。すべて中礫以下の円礫で、時々15×10 cmの大礫も混じえている。

3 遺跡の立地

遺跡は前述の同時異相と思われる、土層と礫層を切って存在する。中世と考えられる土壌群は主として土層域に広がっているが、土壤底に礫のある場合とない場合がある。また礫層中には平安期の遺物が見つかっているが、礫層を切って住居址があるとすれば、この礫層は平安期をさかのばる時期の堆積と考えられる。一方、礫層の下部のローム質土層中に住居址が発見されることがあると、この礫層は平安期後と考えられ興味深い。それは地表から110 cm以下の堆積層中の問題である。

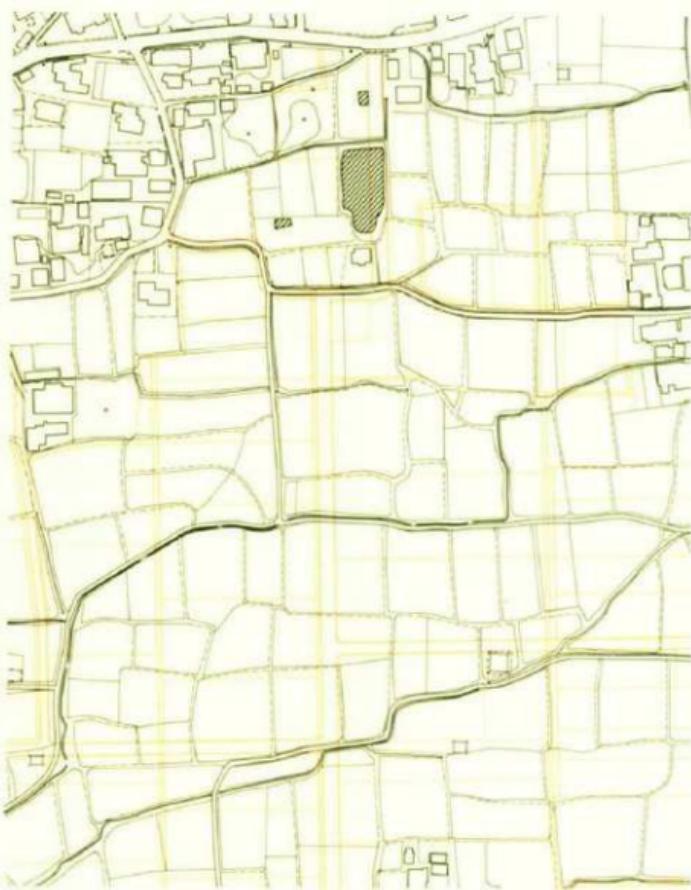
第2節 歴史的環境

1 周辺遺跡

本遺跡の東方約1.5kmを北流する奈良井川の西側一帯、松本市島立、和田、新村、神林、笠賀の各地区は、北の梓川、南の鎮川により形成された平坦な沖積地となっており、古墳時代後期以降を中心とした多くの遺跡が存在している。これらのなかで発掘調査が実施され、性格などがわかっているものについていくつか触れてみたい。

まず鎮川以北で奈良井川に面する島立地区では、奈良井川左岸の段丘にそって北から三の宮遺跡、北条遺跡、南条遺跡がそれぞれ西方に1km以上の奥行きをもって間断なく並び、巨大な遺跡群を形成している。松本市教委による過去5年間の調査¹¹で、この範囲内から200棟に及ぶ竪穴住居址が発見されており、また、昭和60・61年度に財長野県埋蔵文化財センターが行った長野自動車道敷地内の調査は、全面発掘でその面積規模も物凄いものであったが、実に1000棟という驚くべき数の竪穴住居址が現れた¹²。この3遺跡の西奥の一帯は、かつて古代に遡る条里跡の可能性があると強く指摘されていたところ（島立条里的遺構）であるが¹³、今までの数回にわたる発掘調査の所見では、それについて積極的に肯定できる材料は得られておらず、むしろその範囲内から断続的に古代以降の集落址が見出されている¹⁴。先の3遺跡の集落址が、若干密度を薄めながらもさらに西へ延びているという理解が可能であろう。即ち、奈良井川左岸の段丘を東端として南北2km、東西も2kmに及ぶ広範な遺跡、あるいは遺跡群として見ていいきたいものである。遺跡の年代としては、弥生時代の終りから古墳時代の前期にかけてのものが一部の範囲に少数見られる¹⁵のを除くと、他はすべて古墳時代末期以降という点に特徴があり、下限は近世まで続いている。

島立地区の西隣り、新村地区では、先の島立条里的遺構の西に続く古代の条里と考えられたもの（新村条里的遺構）の確認の調査が昭和55年に行われたが、考古学的にはこれも不発で、古代の竪穴住居址と集石状のものが発見されたのみであった¹⁶。この地区ではさらにその西方に続く秋葉原遺跡（古墳群）、安塚古墳群の調査が重要である。両古墳群は東西1.5kmくらいの範囲に広がり、本来は一つのものであったと考えられる。安塚古墳群は昭和53年、秋葉原古墳群は昭和57年に発掘調査され¹⁷、それぞれ9基、5基の古墳が発見されているが、時期は古いもので7世紀の後半、ほとんどは8世紀代にも築造ないしは埋葬が行われていたような終末期の古墳群で、地面を掘り下げて丸い扁平な河原石で無袖の横穴式石室を築くという特徴を共通にしている。周溝もしっかり掘り下げてあるのは入口部一帯のみ、あとは形だけの貧弱な溝で、おそらくはこのときの排土をもって申し訳程度の墳丘を為してあったのであろう。小形の古墳には一人の遺骸を入れるのがやっとという規模の石室もあったが、それでもなりだけは立派な？横穴式石室の態を示していた。また安塚には、石室を造らず、ただ石で囲ったなかに炭や骨片がある遺構も見られたという。この安塚・秋葉原古



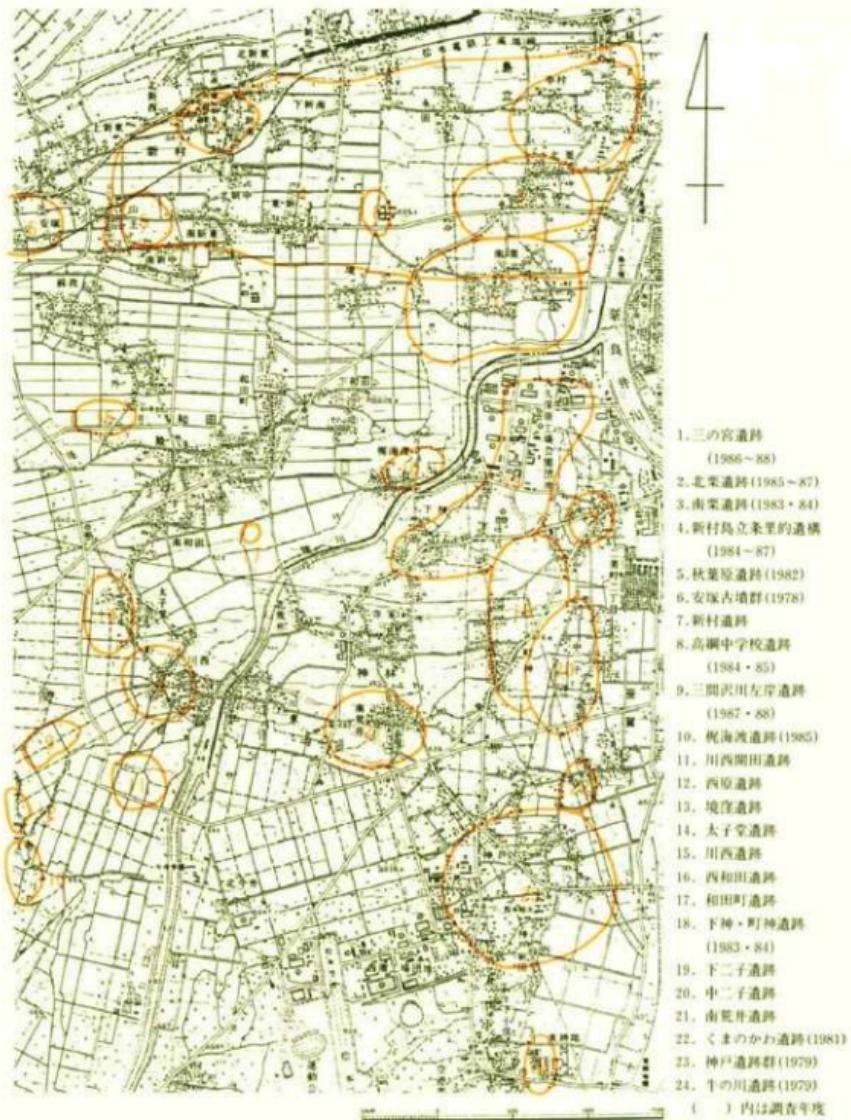
第3図 周辺の地形と調査範囲

墳群の変遷を考えると、次のようになろうか。まず7世紀の後半に草分的なものが現われ、8世紀代にかけて広がっていく。しかし折からの薄暮の流れのなかで、あるいは同族などの集団より個々に対する支配を強めた律令的世界のなかで、大きな石室は新たに造られなくなり（以前よりの石室を持っていた一族はそこへ追葬していったであろうが）、横穴式石室の規範は守ってはいるが規模の小さい個人用のものに変わる。やがて安堵で発見された遺構の様なもう古墳とは言えない墓になっていく。この最後は、時期的には9世紀初頭～前半くらいまでと考える。古墳群の造営集団居住地は、古墳群発生の時期と集落発生の時期がほぼ一致する、先に述べた島立地区の三の宮、北栗、南栗の3遺跡とその一帯をもってあてたい。

新村・島立地区の南に位置する和田地区は、中心部の沖積地部分では発掘調査が行われたことがなく、遺跡の実態は不明であるが、最近同地区的南西端、山形村境の三間沢川左岸遺跡における発掘調査の成果は世の耳目を驚かせた。昭和62・63年の2年次にわたる約2万m²の調査地のなかに、9世紀後半から10世紀前半にかけての270棟余りの竪穴住居址が用水路を中心に展開し、住居址の覆土からは多数の縄文陶器と共に、銅印、鏡などの貴重品がいくつも出土したのである。¹⁰ この遺跡はローム層で形成される地形上にあり、それ以前にも以後にも人の生活の痕跡のない、いわば忽然と現れて約100年の後に同様に消えた、しかも他より突出して富んでいたと考えられる集落の跡で、今のところ出現・消滅の契機の背後関係は全く不明、生産地の推定も困難という状況にある。

鎮川以南を中心とする神林地区を代表する遺跡は、今回調査の下神遺跡であるが、当遺跡の以前の調査については後で触れるのでここでは省く。このほかに神林地区では、鎮川を挟む梶海渡遺跡、川西遺跡の調査があるが¹¹、いずれも遺跡の中心をはずれたらしく、性格等をつかむに至らなかった。

神林地区の東に位置する笠賀地区は、南北に細長く奈良井川に東西面し、北から中二子遺跡、くまのかわ遺跡（上二子遺跡）、神戸遺跡、牛の川遺跡が発掘調査されている。中二子遺跡は昭和60年に飼長野県埋蔵文化財センターが調査、奈良時代を中心とする28棟の竪穴住居址、21棟の掘立柱建物址などが発見されている¹²。くまのかわ遺跡（上二子遺跡）は、昭和56年に松本市教委、昭和60年に飼長野県埋蔵文化財センターが調査し、計9棟の竪穴住居址と、縄文時代中期・後期、奈良～平安時代の遺物が得られている¹³。神戸遺跡は、昭和55年に松本市教委、昭和60年に飼長野県埋蔵文化財センターが調査、平安時代の竪穴住居址27棟をはじめ、掘立柱建物址、中世の水田址などが発見された¹⁴。牛の川遺跡は昭和54年に松本市教委が調査し、縄文時代中期の竪穴住居址10棟、平安時代同1棟が発見され、特に縄文時代中期に伴う膨大な量の土器・石器が出土した¹⁵。この笠賀地区的遺跡の特徴は、奈良井川の段丘にある遺跡は古代の文化層の下に縄文時代のものがあるということだ。この傾向は、同じ立地ある島立地区の奈良井川沿いでも同様で（ただし現地表下約1.5～2mと異常に深く通常はほとんど縄文は目に触れない）、鎮川や梓川と異なり、奈良井川の流路が原始からかなり安定していたことを物語る。



第4図 周辺遺跡

2 下神遺跡の過去の調査

下神遺跡は、今回の調査以前に、松本市教委と御長野県埋蔵文化財センターにより何度か発掘調査が行われている。ここではその概略に触れたい。

下神遺跡の最初の調査は昭和57年12月に遡る。¹⁴⁾ 従来、耕作中の遺物の出土などにより、下神遺跡の範囲は現在の下神集落の一帯と考えられていたが、この冬に始まる県営ほ場整備の工事がその東側外郭地帯に及んだため、松本市教委は確認調査を急速実施したのであった。はたして予想されていた範囲よりはるかに東方にはずれる地点で遺構の存在が確認され、その地点は翌年を持って本格調査に取りかかることとなった。

翌58年5月、市教委は昨冬に遺構確認をした地点の発掘調査を実施する。これが下神遺跡南田尻地籍（略号SKMT）で、奈良～平安時代の竪穴住居址11棟、掘立柱建物址4棟などを検出した。¹⁵⁾ 発掘面積は1200m²あまり。調査にあたって忘れないのは、遺構の残りが非常に良好で、竪穴住居址のなかには壁高70cmを超えるものもあり、加えて一旦乾けば極めて堅固になってしまう土質と相まって、遺構の掘り下げ作業にはいたく難渋したことである。この遺跡の今後の調査への警鐘であった。

次いで同年7月、南田尻地籍の東方、熊坂地籍（略号SKKS）、中道地籍（SKNM）、さらにその東方の長野自動車道建設予定地を越えた 笹賀地区内（SKS）の3地点で、市教委は県営ほ場整備に先立って調査を開始する。調査面積は総計で24000m²に及んだ。発見された遺構は、竪穴住居址67棟、掘立柱建物址31棟、溝址22本、というものであったが¹⁶⁾ 熊坂地籍では遺構の重複が多く、また 笹賀地区内では竪穴住居址の残存状態が良好で深い上に、一辺が10mを超える巨大な住居址が出現したりして、調査日程が大幅に遅れ、とうとう中道地籍については既に検出作業を終えて掘り下げを開始するばかりになっていたすべての遺構（竪穴住居址20棟、掘立柱建物址14棟、溝址5本など）を、ほ場整備の工法を変更し破壊されないようにしてもらい、埋め戻すという手段を取らざるを得なくなってしまった。3つの地区的うちで最も掘立柱建物址が多く遺跡の中心と目されていただけに誠に断腸の思いであった。とはいえ、奈良三彩の小形の短頸壺や佐波理の鏡片、多数の奈良～平安時代にかけての土器などが出土し、大きな成果を収めた調査といえる。

昭和60年になると御長野県埋蔵文化財センターが長野自動車道（当時は中央道長野線といっていた）建設予定地内の発掘調査を開始した。調査地は市教委調査の熊坂地籍と 笹賀地区内の中间一帯とその南である。2年次にわたる、総面積39400m²という大規模な調査であったが、発見された遺構も、竪穴住居址138棟、掘立柱建物址50棟、土壙90基、溝90本、櫛5列と、劣らず見事なものであった。¹⁷⁾ 平面規模115mを測る巨大な竪穴住居址、2条並行し中央に櫛をもつ、集落を区画する溝などの存在は通常の集落とは異なるものとの觀を強くさせる。遺物でも、多量の土器・陶器のほか、陶硯（円面硯）、漆紙文書、皇朝十二錢などの貴重品が多数出土した。中でも墨書き土器の「草茂」は、古文献に見える蘇我郷草茂莊¹⁸⁾にあたる可能性があり、考古学と文献史学を結ぶ貴重な発見とい

えよう。

以上の3次に及ぶ発掘調査により、下神遺跡は東西500m、南北600mという広い範囲に遺構が広がる規模の大きい遺跡であることがわかった。しかもその存続期間は奈良時代の後半から平安時代の中頃までと短いこと、奈良三彩や銅鏡、漆器文書などの特異な遺物が出土していること、文献に見える莊園名らしき墨書き出ていること、等からかなり特殊な集落の中心部に遭遇したものと考えられる。

注

- 1 文獻 12・13・14・16・18
- 2 文獻 3・4
- 3 文獻 1の第四章 6節、628頁。ただし古代に遡るという指摘については、而して文献とのなかで倉持明正氏が懸念を表明している。
- 4 文獻 13・19
- 5 三の宮遺跡の東部で遺跡・遺物の検出がある（文獻 17）
- 6 文獻 8
- 7 安曇山塚群：文獻 5 秋葉原古墳群：文獻 10
- 8 文獻 20
- 9 梶原山遺跡：文獻 15 川西遺跡：文獻 17
- 10 文獻 3
- 11 文獻 3および9
- 12 文獻 3および7
- 13 文獻 6
- 14 文獻 11「付 神林南荒井・下神 遺跡試掘・下神遺跡立合調査報告」
- 15 文獻 11
- 16 文獻 11
- 17 文獻 13・4
- 18 「多武峰地誌」仁和三年（887年）西月十三日の条のなかに「信濃國筑摩郡我御字草茂庄」という記述がある。（文獻 2）。

参考文献

- 1 稲 基義他 1973 「京都市郊・松本市・滋賀市論」第二卷、歴史上
- 2 信濃史研究会 1992 「信濃史誌」第二卷
- 3 - 長野県信濃文化財センター 1986 「長野県信濃文化財センター年報」2
- 4 - 長野県信濃文化財センター 1987 「長野県信濃文化財センター年報」3
- 5 松本市教育委員会 1978 「松本市教育委員会年報」
- 6 松本市教育委員会 1980 「松本市教育委員会年報」
- 7 松本市教育委員会 1981 「松本市神戸遺跡群」
- 8 松本市教育委員会 1981 「松本市新村条里的遺跡」
- 9 松本市教育委員会 1982 「松本市教育委員会まのかわ遺跡」
- 10 松本市教育委員会 1983 「松本市新村秋葉原遺跡」
- 11 松本市教育委員会 1984 「松本市下神・町神遺跡」
- 12 松本市教育委員会 1984 「松本市島立南面遺跡」
- 13 松本市教育委員会 1985 「松本市島立南面・北東遺跡、高瀬中学校遺跡、条里的遺跡」
- 14 松本市教育委員会 1986 「松本市島立街東遺跡」
- 15 松本市教育委員会 1986 「松本市城廻遺跡」
- 16 松本市教育委員会 1987 「松本市島立北東遺跡・条里的遺跡」
- 17 松本市教育委員会 1987 「松本市神林川西遺跡」
- 18 松本市教育委員会 1988 「松本市島立三の宮遺跡」
- 19 松本市教育委員会 1988 「松本市島立条里的遺跡」
- 20 松本市教育委員会 1988 「三隈沢川左岸遺跡（1）」

第3章 調査結果

第1節 調査の概要

1 調査地

今回の発掘調査地一帯は、從来、下神遺跡と考えられている範囲の西端地帯にあたる。調査面積は、当初水田3枚、約2500m²を予定していたが、最初に手を付けた中央の水田での遣構面までの深さが60~100cmと予想外に深く、非常に多量の排土が生じることと、加えて、一帯はかなり平坦では場整備の工事によっての土の切り盛りが少ないとみられたので、急遽調査範囲を水田1枚とし、他の2枚は中央にある程度の大きさのグリッドをあけるにとどめた。中央の大きな調査区を1地区、その北のグリッドを2地区、西を3地区と呼称し、それぞれの面積は、1004.4m²、34.9m²、35.8m²で、計1075.1m²を測る。

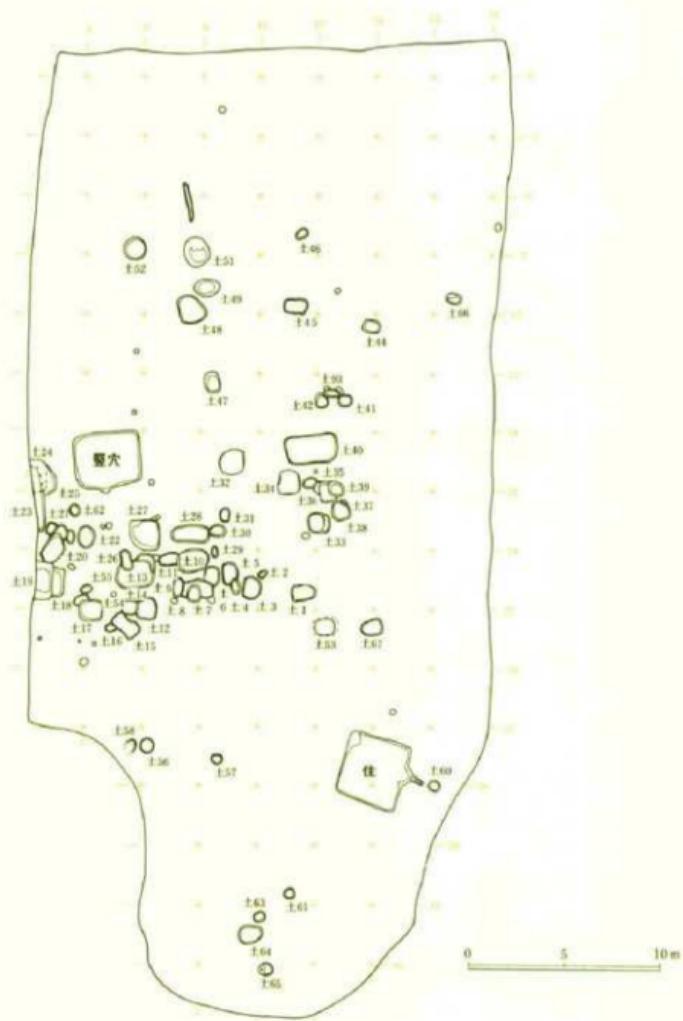
基準点・基準線は、3つの地区を共通して覆う3m方眼を設定し、調査地内の地点を示したり、遣構の測量に用いることのできるものとしたが、遣構が集中するのは中央の1地区だけなので、基準線の名称は1地区を中心としてつけた。1地区的北西隅を起点の0とし、南方および西方に延びる座標系を設定したわけで、地点名は（南北方向、東西方向）の数字で表される座標で示し、1地区内の3×3mのグリッドはその北東隅の座標名に「G」を付けて示す。

遣構名は、1基づつであった竪穴住居址・竪穴状遣構については「第〇号」の番号を冠さず、土壤については検出した順に通し番号をふった。このため隣接する土壤に順次番号が付いてはいないが、重複のあるものに関しては基本的に新しい順になるようにした。

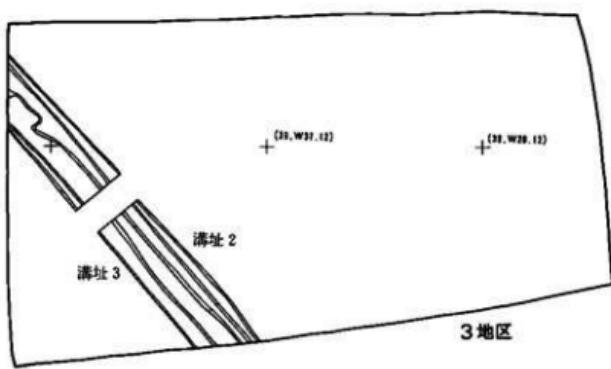
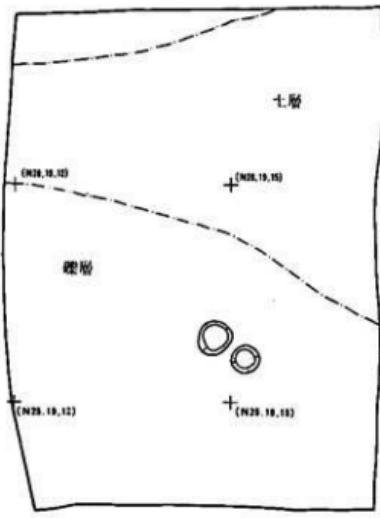
2 調査結果の概要

発見された遣構は、竪穴住居址（以下「住居址」）1棟、竪穴状遣構1基、土壤67基、溝址3本、ピット24基で、ほとんどが1地区に分布する。住居址が若干削り込んだ深さで検出されたほかは、同一の面で確認できた。遣構の主体となる土壤は、平面規模は大小様々で、深さも10cmほどの浅いものから1m近くあるものまでみられる。

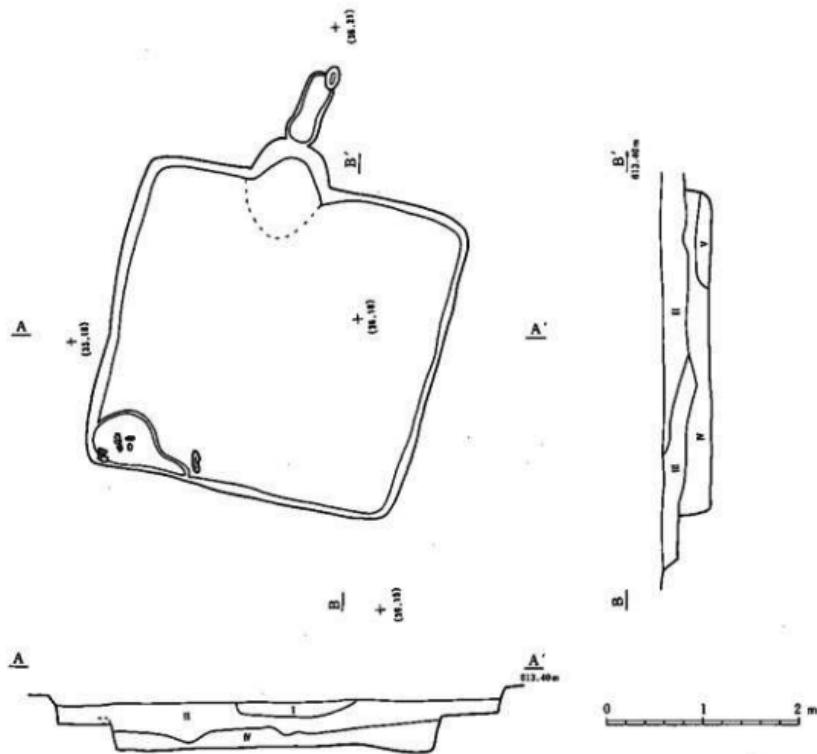
遺物は、土器・陶器・鉄器・古銭・石器等がある。遣構に伴ったのは住居址からの土師器・須恵器、土壤からの土師器（土師質土器）・陶器・鉄器・古銭・石器のそれ一部で、他は検出面から出土した。量は少なく、遺物のすべてを合わせても整理用コンテナー1箱に満たない。



第5回 1地区全体図



第6図 2地区・3地区



- I 日照より離が小さくやや明るい
- II $\phi 1\text{--}2\text{cm}$ 大の円錐多量混入、 $\phi 1\text{cm}$ 大の黄色土ブロック少量混入
人骨褐色土
- III $\phi 1\text{--}3\text{cm}$ 大の円錐少量混入、 $\phi 0.5\text{--}1\text{cm}$ 大の黄色土ブロック無
骨灰入、僅かに黄色・褐色土
- IV $\phi 1\text{--}5\text{cm}$ 大の円錐多量混入、 $\phi 0.5\text{--}5\text{cm}$ 大の黄色土ブロック多
量混入褐色土
- V $\phi 1\text{--}5\text{cm}$ 大の円錐多量混入、 $\phi 1\text{cm}$ 大の黄色土ブロック少量混入
人骨褐色土

第7図 住居址

第2節 遺構

1 住居址（第7図、図版1）

1地区南部、(33、18) Gの一帯に位置する。平面形は、一辺3.3~3.4mの規模をもつ正方形を呈し、床面積は9.95m²を測る。壁の掘り込みは僅かに傾斜する程度で、壁高は北壁26cm、西壁34cm、南壁38cm、東壁26cmを測る。床は地山の暗黄色砂質土を叩いた、平坦で比較的良好堅緻なものであった。本址上面は礫質土のなかに掘り込まれているのだが、10数cm掘り下げるとき地山は礫がなくなり暗黄色砂質土に変じ、床面はその土層中に構築されていたわけである。柱穴はなく、北東隅に浅い窪みが掘られている。カマドは東壁中央のやや北寄りにあり、大きく壁外に張り出している。その先にさらに煙道が75cmにわたって伸びている。両袖はまったく失われており、その間に薄い焼土が見られるのみであった。その他の本址の施設はない。

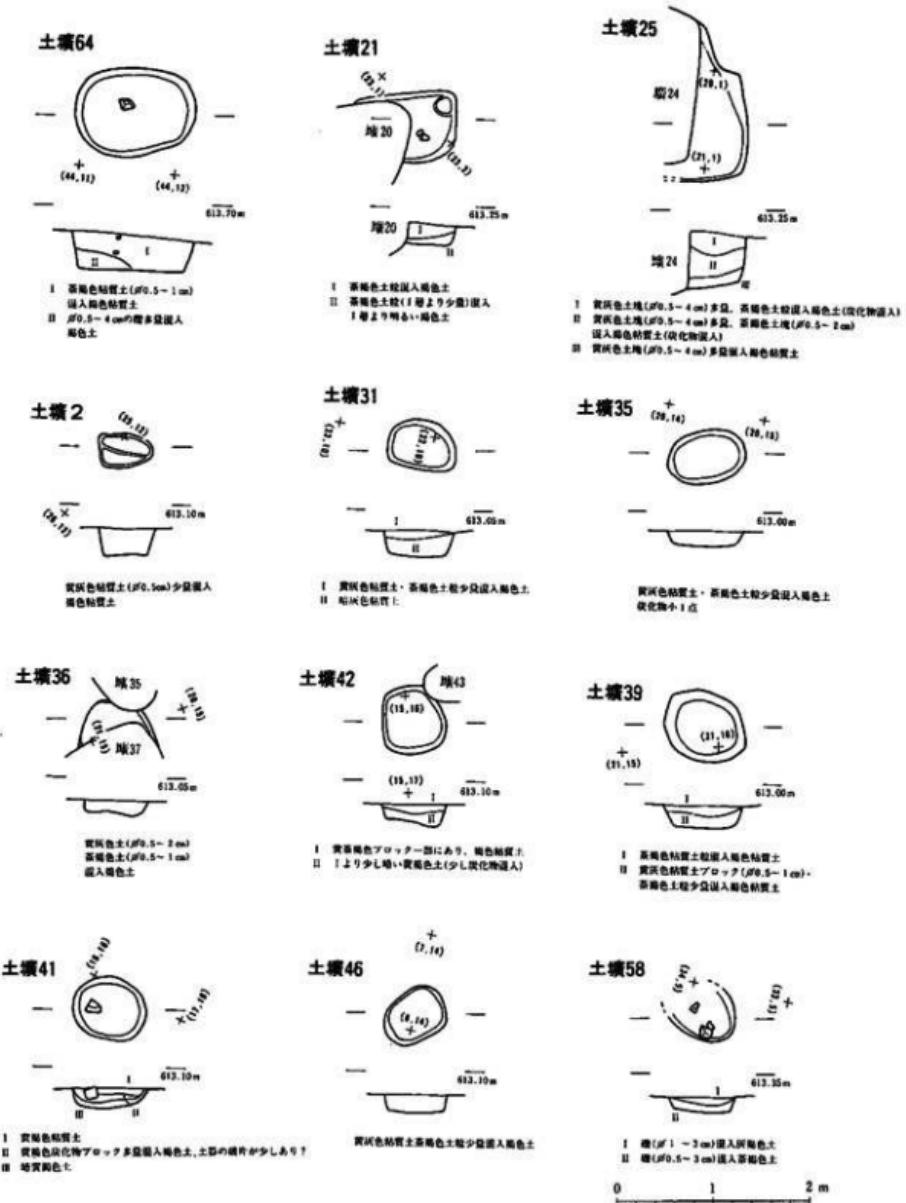
遺物は土器が少量、覆土内から散発的に出土しただけである。図化・提示できたのは第16図3の土師器壺、4の同小形甕の2点のみ。

2 土壙（第8~14図、図版4~25）

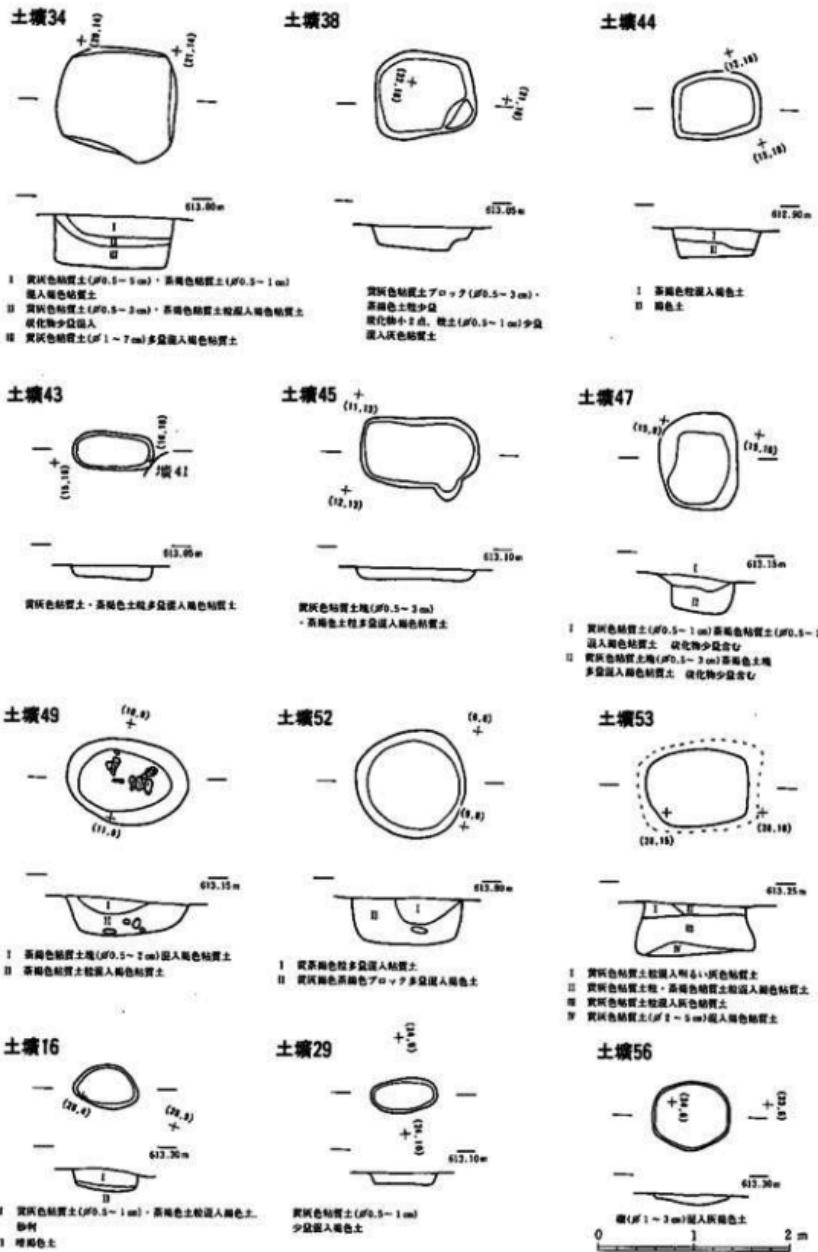
1地区中央部西側を中心67基が検出された。狭い範囲に集中しており、重複が著しい。個々の詳細は一覧表に譲るが、全般的に見ていくつかの傾向がある。まず平面形であるが、不整に歪むものが多いが基本的には円形ないしは稍円形を基調とするものと、長方形を基調とするものの2種類に絞られる。次に、主軸方向ではほとんどが南北あるいは東西を指し、例外は3基しかない。最後は土壙覆土（埋土）の土層についてであるが、やはりほとんどが地山の下層の土である黄灰色弱粘質土の大小の塊を含んでいて単層。あるいは複数層があつても自然堆積を示すものは少なく、いわゆる一括埋没というか人為的な埋没の痕を呈している。このことは深い土壙になると掘り下げていくと覆土が壁から剥がれるよう落ちることでもわかった。

遺物の出土は際立って少なく、まったくなにも無いか、あっても土器・陶器の僅かな破片や釘らしき鉄器、石器（砥石）、古銭、炭の小片、あるいは混入品の打製石斧が少數伴うのみであった。図化・提示できたものは、陶器では土壙20から出土した合子の蓋1点のみ、鉄器では土壙13からの釘、土壙13・21・28・40からの棒状鉄器、土壙8・30・37・40の釘状鉄器、同40の刀子、古銭では土壙19からの元〇通宝、土壙20の嘉祐通宝、石器では土壙27からの砥石、それに土壙40・55からの打製石斧である。

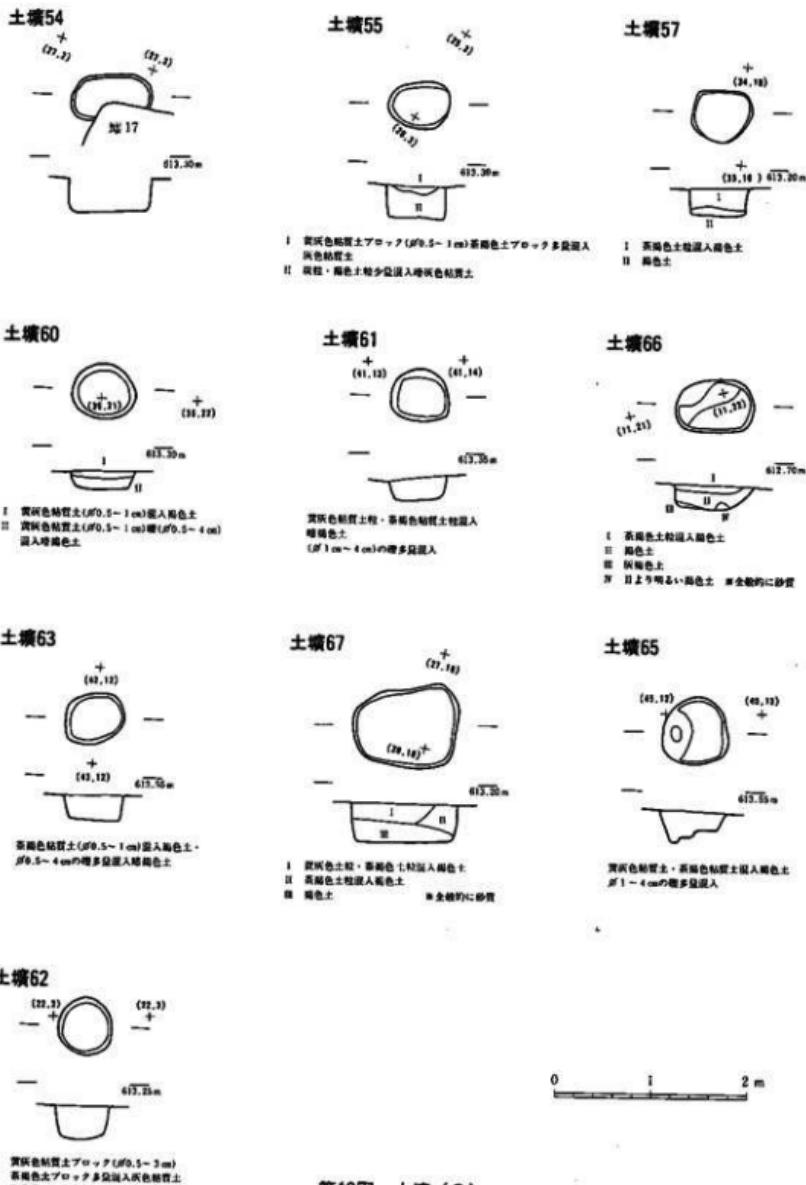
これらの土壙の性格は、形状や埋土からみて墓址と推定される。この種の遺構は今まで松本市内各地区的遺跡で発見されており、主なものは、島立地区の南糞遺跡（昭和59年および60年度調査分）、中山地区向畠遺跡、内田地区清心遺跡等が挙げられる。いずれも個々の土壙の形態や埋土、土壙群の集中の仕方がよく似ているほか、遺物が少なく稀に鉄器・古銭が出土する点も同様である。



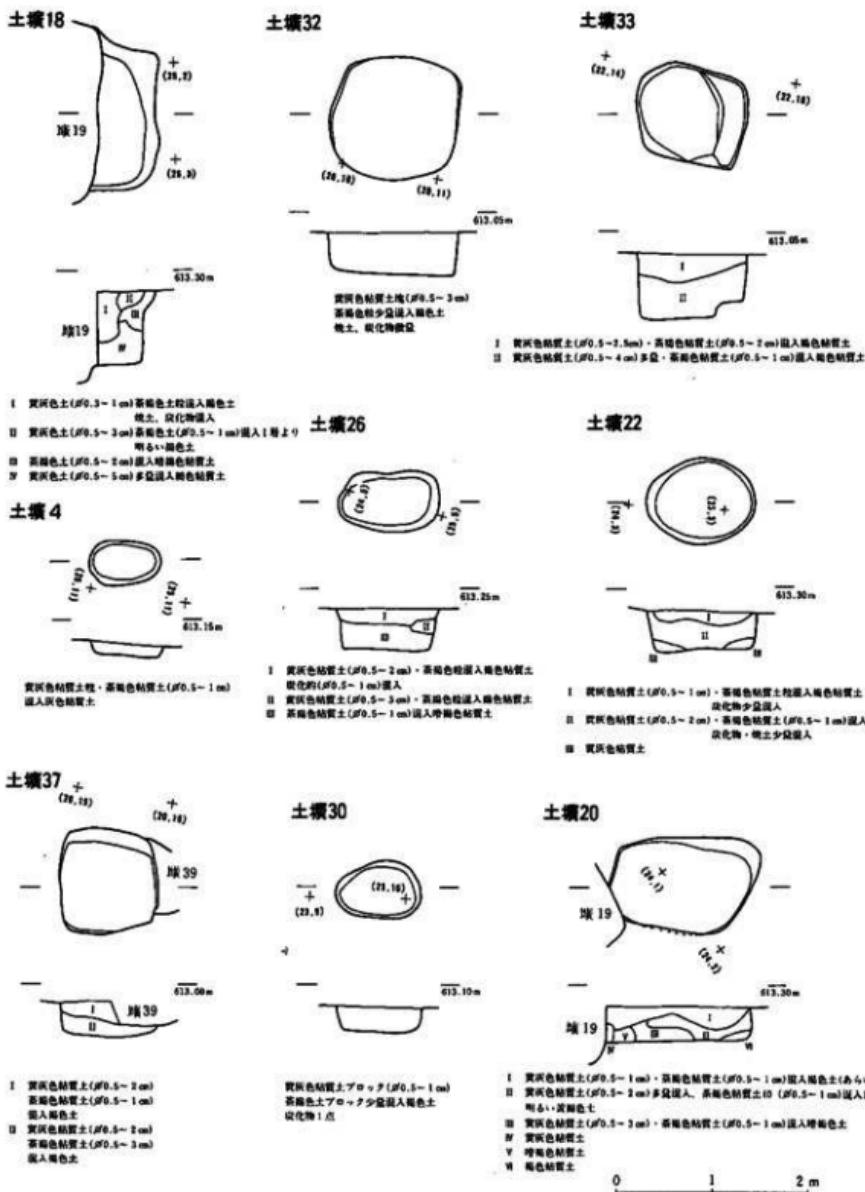
第8図 土壌 (1)



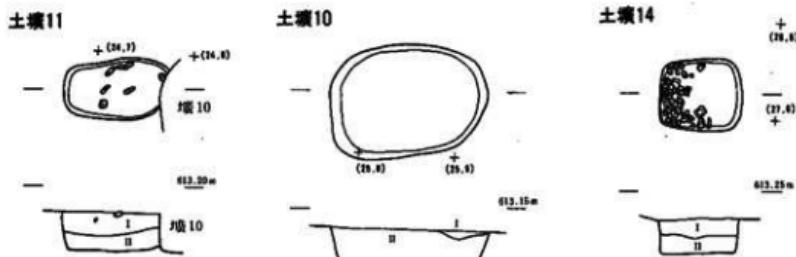
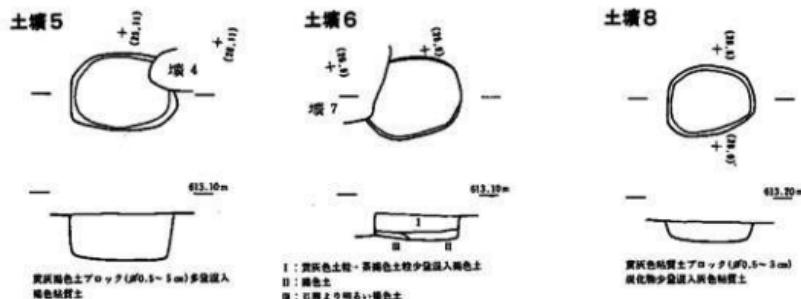
第9図 土壌(2)



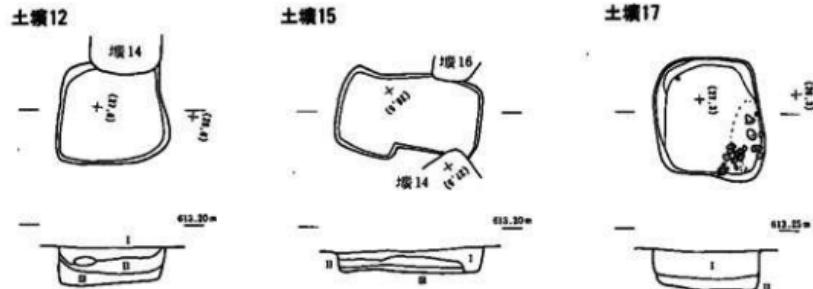
第10図 土壌 (3)



第11図 土壌(4)



Ⅰ：黄灰色粘質土 (d0.5~1cm)・黄褐色粘質土少量混入褐色土
Ⅱ：黄褐色粘質土 (d0.5~3cm)混入褐色土
Ⅲ：黄褐色粘質土ブロック (d0.5~3cm)・炭化物・白帯 (d0.5~2cm) 混入褐色粘質土
Ⅳ：黄褐色粘質土 (d0.5~3cm)・炭化物混入褐色粘質土
Ⅴ：白帯より明るい褐色土

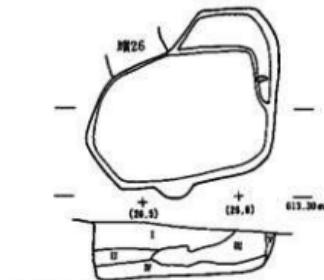


Ⅰ：黄灰色粘質土 (d0.5~2cm)・黄褐色粘質土 (d0.5~1cm) 混入褐色粘質土
Ⅱ：黄褐色粘質土 (d0.5~3cm) 混入褐色粘質土
Ⅲ：黄褐色粘質土 (d0.5~1cm) 少量、黄褐色粘質土粒・性土・炭化物混入褐色粘質土
Ⅳ：黄褐色粘質土



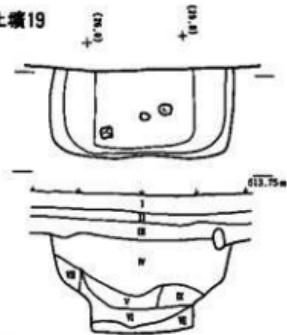
第12図 土壤(5)

土壤13



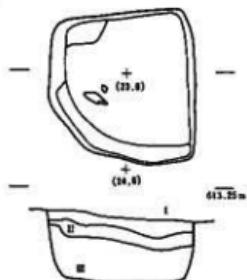
- I : 黄褐色土 ($\phi 0.5 \sim 1$ cm) - 茶褐色土粒混入褐色土
炭化物少量混入
- II : 黄褐色土 ($\phi 0.5 \sim 3$ cm) 土壌より少なめの茶褐色土粒混入暗褐色土
- III : 黄褐色土 ($\phi 0.5 \sim 4$ cm) - 茶褐色土粒混入褐色土
塊状混入褐色土
- IV : 黄褐色土 ($\phi 1 \sim 6$ cm) 多量混入褐色土
- V : 黄褐色土粒混入褐色土

土壤19



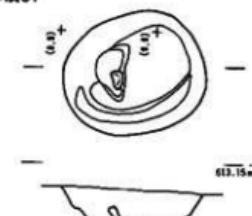
- I : 黄褐色土粒混入灰褐色土
- II : 黄褐色土粒多量混入褐色土
- III : 褐色土
- IV : 黄褐色粘质土 ($\phi 0.5 \sim 3$ cm) 混入褐色粘质土。炭化物・塊土少量混入
- V : 黄褐色粘质土 ($\phi 0.5 \sim 4$ cm) 多量混入褐色粘质土。炭化物・塊土少量混入
- VI : 黄褐色粘质土 ($\phi 0.5 \sim 6$ cm) 多量混入褐色粘质土
- VII : 黄褐色粘质土 ($\phi 1 \sim 8$ cm) 多量混入褐色粘质土
- VIII : 黄褐色粘质土 ($\phi 0.5 \sim 2$ cm) 混入褐色粘质土
炭化物・塊土少量混入

土壤27



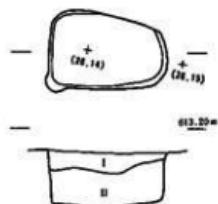
- I : 黄褐色粘质土 ($\phi 0.5 \sim 1$ cm) - 茶褐色粘质土 ($\phi 0.5 \sim 1$ cm)
混入褐色粘质土(炭化物少量混入)
- II : 黄褐色粘质土 ($\phi 0.5 \sim 3$ cm) 茶褐色粘质土 ($\phi 0.5 \sim 1$ cm)
少量混入褐色粘质土(炭化物少量混入)
- III : 黄褐色粘质土 ($\phi 0.5 \sim 5$ cm) 多量混入褐色粘质土
(炭化物少量混入)

土壤51



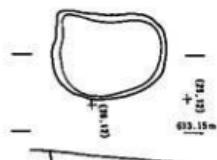
- 黄褐色粘质土 ($\phi 0.5 \sim 5$ cm) 多量混入
- 黄褐色粘质土 ($\phi 0.5 \sim 3$ cm) 混入
褐色粘质土

土壤1



- I : 黄褐色粘质土 ($\phi 0.5 \sim 5$ cm) - 茶褐色粘质土 ($\phi 0.5 \sim 1$ cm)
混入褐色粘质土。炭化物少量混入
- II : 黄褐色粘质土 ($\phi 1 \sim 7$ cm) 多量混入褐色粘质土
炭化物少量混入

土壤3



- 黄褐色粘质土ブロック ($\phi 0.5 \sim 3$ cm) - 茶褐色土ブロック
多量混入褐色粘质土。炭化物少量混入

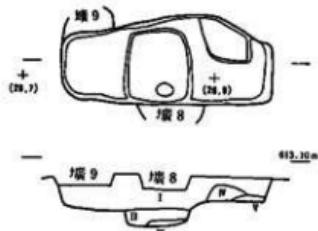
土壤9



- 黄褐色粘质土ブロック ($\phi 0.5 \sim 1.5$ cm) -
茶褐色土ブロック多量混入褐色粘质土

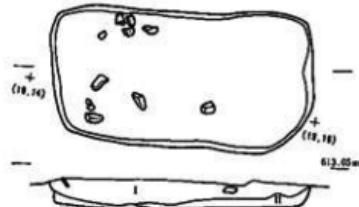
第13図 土壌(6)

土壤 7



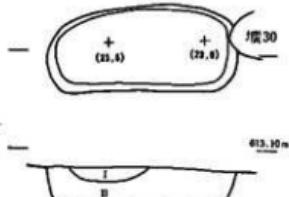
I : 黄褐色粘質土 ($\delta 0.5\sim 3$ cm)・茶褐色粘質土 ($\delta 0.5\sim 1$ cm)混入褐色粘質土
II : 黄褐色粘質土 ($\delta 0.5\sim 5$ cm)混入褐色粘質土 (下部土層覆土)
III : 褐色粘質土 (下部土層覆土)
IV : 褐色粘質土 ($\delta 1\sim 2$ cm)混入 I 層より明い褐色粘質土
V : 褐色粘質土
VI : 褐色粘質土

土壤 40



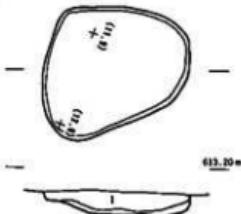
I : 黄褐色粘質土・茶褐色粘質土 ($\delta 0.5\sim 4$ cm)・△粒混入褐色粘質土
(地土 1 点、表 2 点)
II : 黄褐色粘質土・茶褐色粘質土 ($\delta 0.5\sim 2$ cm)被化物、鐵土混入褐色粘質土
△ : 褐色粘質土

土壤 28



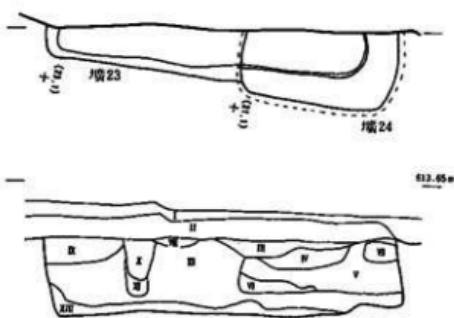
I : 黄褐色粘質土
II : 黄褐色土ブロック ($\delta 0.5\sim 7$ cm)多量混入褐色土

土壤 48



I : 黄褐色粘質土塊 ($\delta 0.5\sim 1.5$ cm)・茶褐色粘質土
II : 黄褐色粘質土塊 ($\delta 0.5\sim 1.5$ cm)混入褐色粘質土

土壤 23・24



I : 土上 (茶褐色粘質土)
II : 塵や小石混入褐色土
III : 深さ0.5~1cm灰褐色土ブロック多量混入褐色粘質土 ■地図一様：土壤 24 粘土
△ : $\delta 0.5\sim 3$ cm大
▽ : ブロック
▽ : ブロックが若干少なくベースがやや高い
□ : V と同上
□ : ブロック $\delta 0.5\sim 4$ cm大、ベースや中粒
△ : V と同上
△ : ブロック $\delta 0.5\sim 5$ cm大、極めて多量混入
△ : 地上部 ($\delta 0.5$ m)、粘土 ($\delta 0.5\sim 1$ m)多量混入褐色粘質土 ■地図一様：土壤 24 粘土
△ : 褐色土ブロック $\delta 0.5\sim 1$ cm多量混入褐色粘質土
△ : ほとんど褐色ブロック入り茶褐色粘質土
△ : 褐色土ブロック $\delta 0.5\sim 2$ cm多量混入褐色粘質土
△ : 褐色土ブロック $\delta 0.5\sim 2$ cm多量混入褐色粘質土
△ : 褐色土上に褐色ベースがブロック状に混入
($\delta 0.5\sim 3$ cm)

0 1 2 m

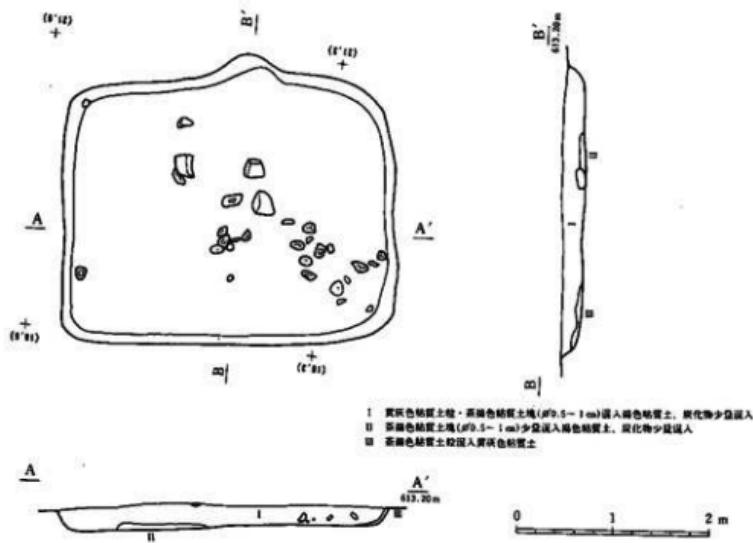
第14図 土壤(7)

第1表 土壙一覧表

番号	掲載図	位 置	平面形 規模(cm)	断面形 深さ(cm)	出土遺物	切合関係		備 考
						…を切る	…に切られる	
1	13	(25・26, 14・15)	不整長方形 124×82	長方形 54	土師器壺片			
2	8	(24・25, 12・13)	不整長方形 37×18	台形 30	なし			
3	13	(25・26, 12)	不整椭円形 119×88	台形 38	なし			
4	11	(25・26, 11)	椭円形 74×56	皿形 13	なし	横5		
5	12	(24・25, 11)	長方形 112×79	長方形 48	なし		横4	
6	12	(24・25, 10)	椭円形 98×84	長方形 24	なし	横7		
7	14	(25・26, 8~10)	不整長方形 214×92	不整長方形 53	なし	P・横6	横8・9	下部にもう 1基の土壙
8	12	(25・26, 9)	不整椭円形 94×72	皿形 20	土師器小形 裏片 錐器1	横7		
9	13	(25・26, 8)	椭円形 100×58	皿形 14	須恵器環片	横7		
10	12	(23・24, 8~10) (25, 8・9)	椭円形 166×116	台形 39	古鏡 (鏡種不明)	横11		
11	12	(24, 7・8)	不整長方形 ×64	長方形 40	鉄器 皮化物	P	横10	
12	12	(26・27, 6・7)	方形 118×106	長方形 39	なし		横14	
13	13	(24・25, 5~7)	不整方形 196×156	長方形 60	須恵器環片 鉄器	P	横26	
14	12	(26・27, 5・6)	方形 86×76	長方形 36	炭化材	横12・15		碳多數
15	12	(26, 5 27・28, 5・6)	不整長方形 152×86	皿形 25	なし		横14・16	
16	9	(27・28, 2・3)	不整椭円形 66×46	不整長方形 23	なし	横15		
17	12	(26・27, 3・4)	不整方形 128×110	不整長方形 40	炭化物	横54		
18	11	(24~26, 1・2)	×170	長方形 56	なし		横19	南西部に横
19	13	(24~26, 1・2)	方形か 186×	お椀形 96	古鏡 (鏡種不明) 1 土師器片	横18・20		二段底
20	11	(23・24, 1・2)	不整長方形 146×100	長方形 38	古鏡 (鏡種不明) 1 須恵器環片	横21	横19	
21	8	(22, 2・3) (23, 1~3)	長方形か ×73	長方形 22	鉄器	P	横20	
22	11	(22・23, 3・4)	椭円形 114×90	長方形 42	なし			
23	14	(19~23, 1)	336×	不整長方形 80	なし		横24・25	
24	14	(19~21, 0・1)	×164	長方形 56	なし	横23		
25	8	(19, 1 20・21, 1・2)		方形 60	炭化物		横23・24	
26	11	(23・24, 5・6)	不整方形 106×64	長方形 44	須恵器環片	横13		
27	13	(22・23, 6・7)	不整方形 160×154	台形 70	須恵器環片	P		

番号	掲載図	位 置	平面形 規格(cm)	断面形 深さ(cm)	出土遺物	切 合 間 係		備 考
						…を切る	…に切られる	
28	14	(22・23, 8~10)	不整長方形 200×88	台形 40	鉄器(釘?) 炭化穀子		壙 30	
29	9	(23・24, 10)	楕円形 70×36	台形 12	炭化物			
30	11	(22・23, 10・11)	不整楕円形 90×60	台形 25	鉄器	壙 28		
31	8	(21・22, 10・11)	不整長方形 72×52	皿形 28	なし			
32	11	(18・19, 10~12) 20, 11	方形 134×128	長方形 44	なし			
33	11	(21・22, 15・16)	不整長方形 118×98	不整長方形 68	なし			
34	9	(19~21, 13・14)	不整方形 123×117	長方形 53	土師器片			
35	8	(20, 15)	楕円形 84×55	皿形 17	なし	壙 36		
36	8	(20, 15・16) 21, 15		不整長方形 16・11	なし		壙 35・37	
37	11	(20, 15・16) 21, 16	方形 106×102	不整長方形 36	頭蓋骨 中世陶器片 鐵器(刀)	壙 36	壙 39	
38	9	(21・22, 16・17)	不整方形 104×91	不整舌形 23	なし			
39	8	(20・21, 16・17)	不整楕円形 94×70	不整長方形 22	土師器片	壙 37		
40	14	(17, 16 18・19, 14~16)	長方形 270×146	皿形 28	土師器片 頭蓋骨 鐵器(刀手・釘)			
41	8	(15, 17 16, 16・17)	楕円形 78×66	不整長方形 21	なし	P		
42	8	(15・16, 15・16)	不整方形 70×66	不整長方形 22・16	なし		壙 43	
43	9	(15・16, 16・17)	楕円形 82×40	皿形 14	なし	P, 壙 42	壙 41	
44	9	(12, 18・19)	長方形 91×74	台形 30	なし			
45	9	(11, 14・15)	不整長方形 124×86(72)	皿形 12	なし			
46	8	(7・8, 14・15)	不整長方形 70×50	長方形 18	なし			
47	9	(14, 10 15, 9・10)	長方形 100×82	不整長方形 37	なし			
48	14	(10, 8・9 11・12, 8~10)	不整方形 152×134	皿形 28	なし			
49	9	(10~11, 9・10)	楕円形 128×90	不整長方形 34	土師器片			壁
51	13	(8・9, 8~10)	楕円形 148×128	皿形 38	なし			
52	9	(8・9, 5・6)	円形 116×114	長方形 42	なし			
53	9	(27・28, 15・16)	長方形 108×80	不整長方形 54	なし			袋状断面
54	10	(26, 3・4)	楕円形 86×44	長方形 34	なし		壙 17	
55	10	(25・26, 3・4)	楕円形 62×48	長方形 34	炭化物			
56	9	(33・34, 6・7)	不整長方形 80×72	皿形 10	なし			
57	10	(34, 10・11)	不整長方形 60×52	不整長方形 28	なし			

番号	掘戻回	位 置	平面形 規模(cm)	断面形 深さ(cm)	出土遺物	切 合 開 保		備 考
						…を切る	…に切られる	
58	8	(33・34, 6)	楕円形か ×62	不整長方形 14	なし			
60	10	(35・36, 21・23)	楕円形 64×56	不整合形 18	土師器壺片 数点			
61	10	(41, 14)	不整形 58×54	皿形 24	なし			
62	10	(21・22, 3)	円形 60×58	U字形 34	なし			
63	10	(42, 12・13)	楕円形 66×52	台形 28	なし			
64	8	(42, 12 43, 11-13)	楕円形 126×92	舌形 40	須恵器壺片			
65	10	(44, 13 45, 12・13)	不整円形 68×68	不整合形 34・18	なし			
66	10	(10・11, 22・23)	楕円形 80×54	不整長方形 24	なし			
67	10	(27・28, 18・19)	不整長方形 110×82	長方形 42	なし			



第15図 穴状遺構

3 穴状遺構（第15図）

1 地区中央部、(21, 3) の G の一帯に位置する。他遺構との重複はない。南北 2.7 m、東西 3.4 m の隅丸長方形を呈し、北辺の中央部東寄りがやや外へ張り出す。壁の傾斜は緩やかで、深さは 16~20 cm を測る。底面は地山の暗黄褐色砂質土や黄灰色弱粘質土がそのまま露出し、平坦だがあまり堅くない。埋土は基本的に褐色の弱粘質土単層で、それに黄灰色弱粘質土粒や炭化物粒が混入しているものだが、底面付近や端部では若干異なる。本址中央から南東隅にかけて点在する 5~20 cm 大の礫 20 数個は自然に流入したとは考えられず、人為的に持ち込まれたものと見られるが、用途は不明である。

遺物は土師器壊・須恵器蓋・壺・甕のそれぞれ小片、炭片、鉄滓が出土した。量はわずかで、図化・提示に耐えられる大きさのものもない。本址の性格は不明だが、遺物のあり方や埋土の様子から、土壤群に伴う何らかの施設ではないかと考えている。

4 溝址（第5・6図）

1地区に1本（溝址1）、3地区に2本（溝址2・3）発見されている。溝址1は1地区北部にあり、長さ2m、幅20cm、深さは平行10cmと小規模なもので、遺物はなく性格も不明。溝址2と3は3地区的西端にあり、並行して北西から南東方向へまっすぐに走る。周囲に鉄・マンガンが集積して染み込んでおり、流路だったことがわかる。溝址2は幅が26~46cm、深さ14~17cm、溝址3は幅が12~22cm、深さ26~36cm、長さは区域内に現われた部分でいすれも5m弱である。遺物はない。

第3節 遺物

1 住居址出土の遺物

土器が少量出土しただけである。図化・提示できたのは第16図3の土師器壺、4の同小形甕の2点のみ。その他には外面にハケメのある土師器の甕、須恵器の大甕、底面に回転糸切り痕の残る須恵器の壺の破片が出土している。図化した3の壺はロクロ調整で内面横方向へのラミガキ・黒色処理、4の甕はロクロナデとカキ目をかけておきながらわざわざ外面下半にハケメを施し、底面の回転糸切り痕は手持ちヘラケズリで削り取っているというかわった土器である。総体的に見て8世紀後半代の時期が与えられる。

2 土壌出土の遺物

(1) 土器・陶器

第1表に示すとおり、いくつかの土壌から土師器（土師質土器）・須恵器・陶器が出土している。ほとんどが小破片で、図化提示できたのは土壌20出土の合子の蓋（第16図1）1点のみである。図化できなかったものの大半は平安時代以前の土師器・須恵器の壺・甕・壺などの小片で、量もなく、土壌に本来伴うものではないと考える。中世以降の陶器は、図化した蓋の他は、土壌27から天目茶碗、土壌37からこね鉢の破片が出土している。

(2) 鉄器

土壌出土の鉄器は点数、器種とも少なく12点である。1~6までは棒状鉄器である。実際の用途はわからない。1は上部が鎌の塊になっているため太く、断面はやや四角っぽくその中心は4×2mmの空洞があいている。2は太さの半分ほどが鎌であり芯は細い。前後とも欠けている。3は先端が丸く、縦に筋が入っている。4は直角にちかく曲がっているもの。5は断面上部は四角っぽいが、下部は丸くなっている。6は長く先端がとがっている。断面はやや四角ばかり、その中心は小さい三角状の孔があいている。7~11は釘状のもので、7は頭の部分が平らで断面は中間は三角形、先端は円形である。8は縦に筋が入っている。10は上部が鎌の塊で大きく膨らんでいるが、芯は細く

その中心は空洞である。11は曲がっているが中心は空洞である。12は刀子で大きく曲がっている。断面は中が中空になっている。鍛造時に重ね合わせた部分であろう。外側は太く銷附している。出土地点は3～5・11・12が土壙40覆土、6・7が土壙13、1が土壙21覆土、2が土壙28、8が土壙37覆土、9が土壙8出土である。

(3) 古銭

古銭は3点出土しているが、1点は破片のみのため図示しなかった。16は嘉祐通宝、17は元祐通宝らしい。いずれも火にかかっているためか脆くこわれやすい。

(4) 石器

土壙27から砥石が、土壙40・55から打製石斧が出土している。打製石斧は縄文時代のものであり、混入品であろう。詳細な観察は石器一覧表（第2表）に譲る。

3 検出面出土の遺物

(1) 土器・陶器

縄文土器・土師器・須恵器・中世陶器・近世陶器が出土している。いずれも小破片で、図化・提示できたのは、第16図2の須恵器壺、5の近世陶器皿の2点のみである。陶器の皿は高台がケズり出して内面のみに施釉がある。図示できなかったものでは、縄文中期中葉に属するとみられる土器片が数点、1地区の北部（9、6）G周辺の狭い範囲からまとめて出土した。また奈良、平安時代の須恵器の壺片や环が住居址周辺の礫質土のかなり広い範囲から散発的に得られたほかは、検出面にごくまれに中世陶器や磨滅した土師器の小片があつただけである。縄文土器の出土地点付近からは打製石斧の出土もあり、該期の遺構があるのではないかと精査を重ねたが発見できなかった。

(2) 鉄器

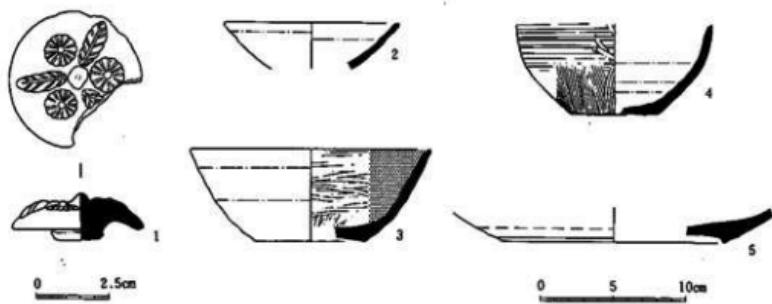
2点出ている。13・14ともに不整形でその原形がどうか判明しない。用途についてもわからない。

(3) 古銭

1点出土している。15は寛永通宝で淡銭である。

(4) 石器

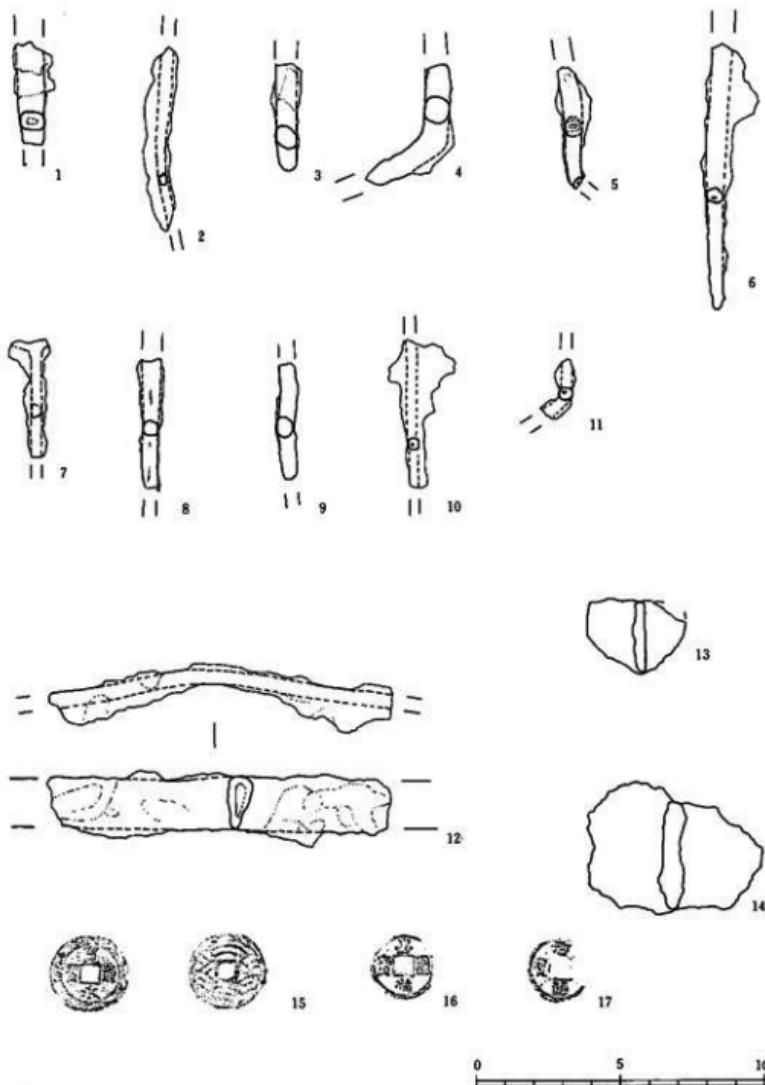
検出面から3点の打製石斧が出土している。いずれも縄文時代のもので、今回発見の遺構に伴うものではない。個々の観察は石器一覧表に譲る。



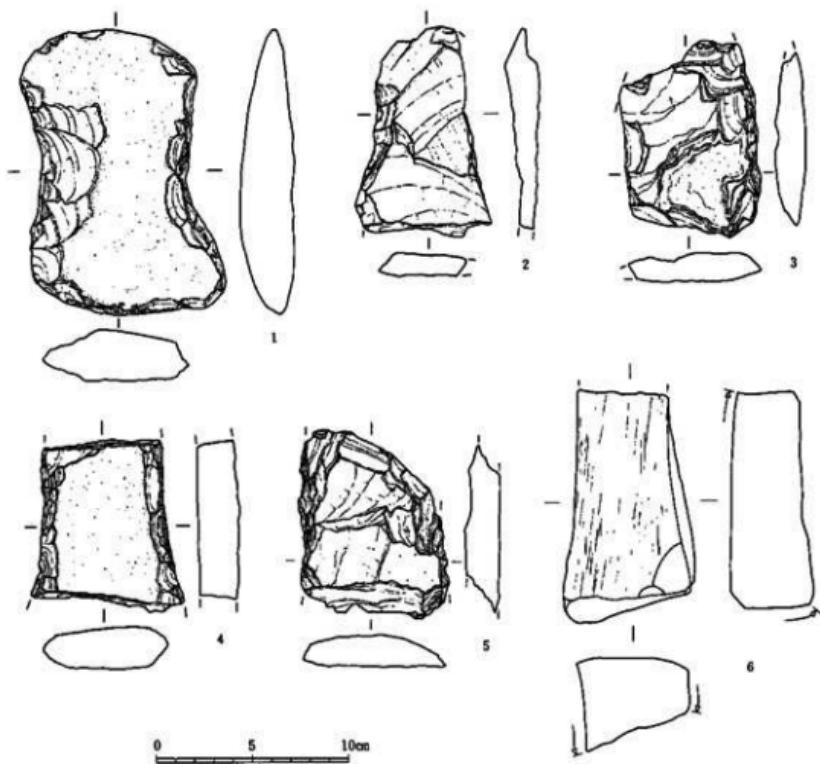
第16図 出土土器・陶器

第2表 鉄器・古銭一覧表

図 No.	出土 造 横	品 名	寸 法 cm			重 量 g	備 考
			長さ	巾	厚さ		
1	土壤21櫻土	棒状鉄器	(3.5)	0.9	0.7	6.90	先後欠
2	土壤 28	"	(6.3)	(0.4)	(0.4)	6.81	二つに切損・接合 先後欠
3	土壤40櫻土	"	(3.7)	0.8	0.8	4.45	上部欠
4	"	"	(4.7)	0.8	0.9	8.09	二つに切損・接合 先後欠
5	"	"	(4.2)	(0.7)	(0.7)	3.78	" "
6	土壤 13	"	(9.2)	0.7	0.5	14.50	" 上部欠
7	"	釘	(4.0)	(0.4)	(0.4)	3.10	" 先後欠
8	土壤37櫻土	釘状鉄器	(4.5)	(0.5)	(0.5)	3.68	" "
9	土壤 8 No.1	"	(4.0)	(0.4)	(0.4)	2.61	" "
10	土壤 30	"	(5.1)	(0.3)	(0.3)	10.20	" "
11	土壤40櫻土	"	(2.0)	(0.4)	(0.4)	1.20	先後欠
12	"	刀 子	(11.7)	1.9	0.8	41.70	二つに切損・接合 先後欠
13	検出面 不明	(3.7)	(2.4)	(0.4)	9.51		
14	"	"	(5.7)	(4.3)	(0.8)	30.59	
15	"	古 銭				3.32	寛永通宝・洪武 完
16	土壤 20	"				1.04	嘉祐通宝 緑欠
17	土壤 19	"				1.53	元祐通宝 " 二つに欠けている



第17図 鉄器・古錢



第18図 石器

第3表 石器一覧表

No	出土遺構	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石 材	欠損状況	備 考
1	土壤 40	打製石片	14.78	10.29	2.80	534	砂岩	完形	分側形・凹刃、刀部摩耗、側縁部つぶれ
2	土壤 55	打製石片	(10.93)	(7.02)	(1.72)	(127)	砂岩	頭部片側～刃部	不明・不明
3	検出面	打製石片	(10.18)	(7.05)	1.55	(178)	砂質泥岩	上半欠	不明・鋸刃、刀部摩耗
4	検出面	打製石片	(8.63)	(7.98)	(2.11)	(236)	砂岩(細粒)	頭・刃部欠	側形・不明、側縁部つぶれ
5	検出面	打製石片	(9.44)	(7.79)	(1.95)	(182)	石質泥岩 (ホルンヘルス)	頭・刃部欠	不明・不明
6	土壤 27	砥 石	(5.55)	(3.36)	(2.31)	(57.37)	凝灰岩	只欠	(底面4)

第4章 結語

今回の調査の最大の目的は、昭和58年の松本市教育委員会の調査と、昭和60年の財團法人埋蔵文化財センターの調査で捉えた、下神遺跡の奈良時代から平安時代にかけての大集落が、西方にどこまで伸びているかを探ることであった。今回調査地においても該期の遺構が多数現れるようであれば、この古代集落は我々の予測を遥かに超えた規模をもつものということになり、再び遺跡の性格・範囲をつかみ直さねばならない。大変だと思う反面、そうあってほしいという期待がなかったわけでもない。幸い(残念ながら)、調査の結果は本書に示したとおり、中世の墓と推定される土壙を67基検出し、当初めざした古代の遺構は住居址1棟にとどまった。

古代について言うならば、住居址1棟があったとはいえ、とにかくその時期の遺物の散布が薄い。住居址周辺の礫質土中から少量がまとまってあった程度で、これとて住居址に関連するものであろう。調査面積が過去の調査に比べ狭いので点在する住居址・遺構を捉えきれないのだ、という意見が出ることを重々承知のうえで、敢えて言うなら、やはり今回調査地は下神遺跡の古代集落の外周部・境界にある。ただ住居址の数が少ないとだけではなく、検出面からの遺物の少なさからもそれを強く感じたのであった。発見された1棟の住居址は出土土器からすると8世紀末から9世紀の前半くらいの年代に位置付けられ、下神遺跡の最盛期と重なる。

中世の土壙群はそのほとんどが墓址と推定されるが、根拠は状況証拠のみで、墓であることを直接に証明するものはない。ただ近年、各地の発掘調査で同様の遺構がもっと大規模に見つかっており、性格の確定も時間の問題であろう。時期的には伴う遺物が少なすぎて細かいことは言えないがおおむね14~15世紀が中心となる。今回の調査地内での分布は西に偏り、さらに西方の伸びることは疑いない。下神遺跡でのこの種の遺構の発見は今回が初めてで、本調査地が古代集落の西限に近いものであつただけなく、中世にかかる遺構の東端部であったことは非常に意義深いものと思われる。

最後に、神林地区での県営整備事業に伴う発掘調査は、第2章に記したように、当市教育委員会では昭和57年の試掘に始まって、昭和58年の下神、昭和60年の梶海渡、昭和61年の川西、の各遺跡で実施してきた。今回でそれも最後になるわけだが、この間、調査地の選定や調査の実施にあたっては神林川土地改良区や地元関係者の皆様にはなにかと御無理をお願いし、御協力を頂いた。また、各調査に参加してくださった方々、御指導頂いた研究者の皆様の御協力も忘れられない。ここにあらためて御礼申し上げ、満腹の謝意を表する次第である。

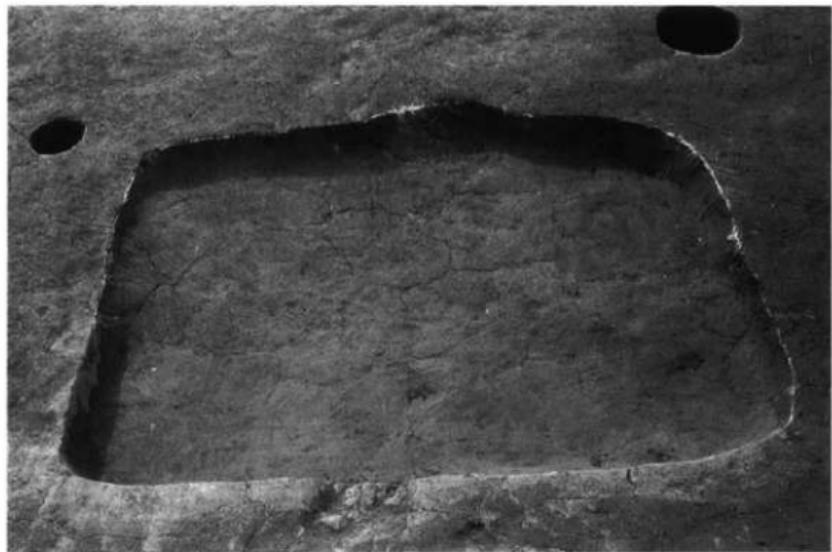
図 版



1地区 南から見たところ



住居址 西から見たところ



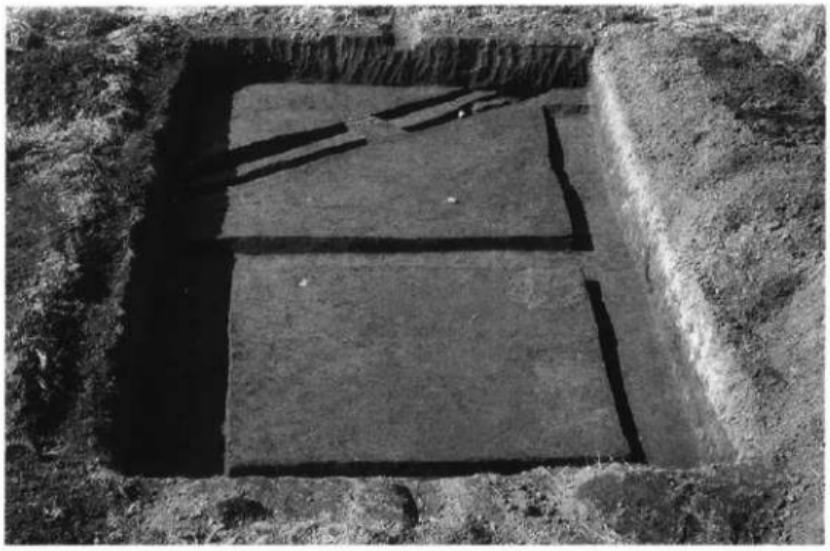
2 竖穴状遺構



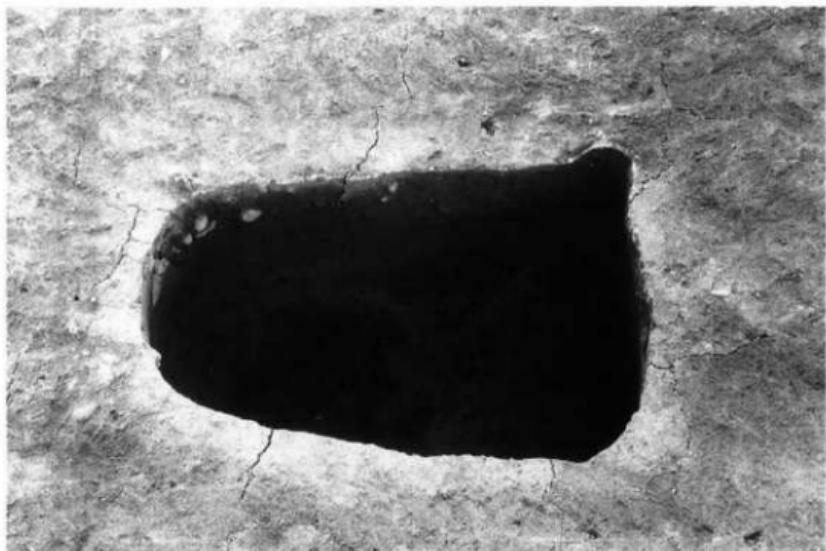
3 地区



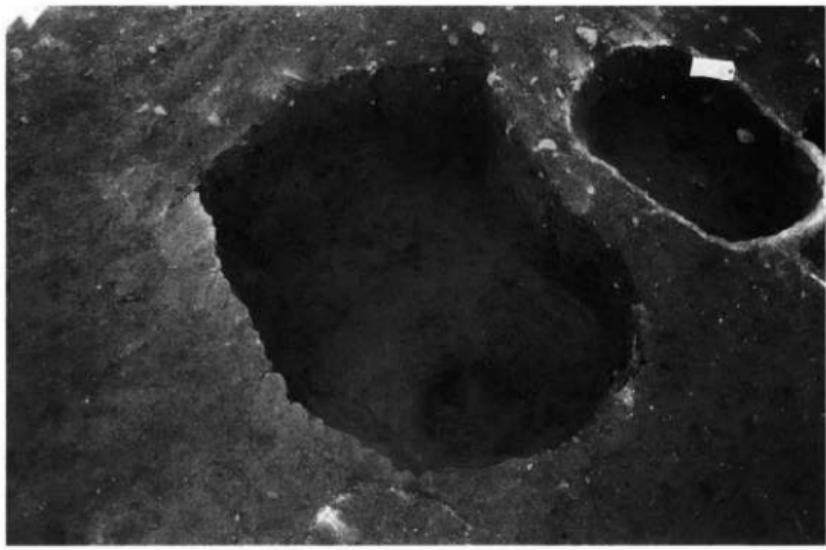
2 地区全景 東から



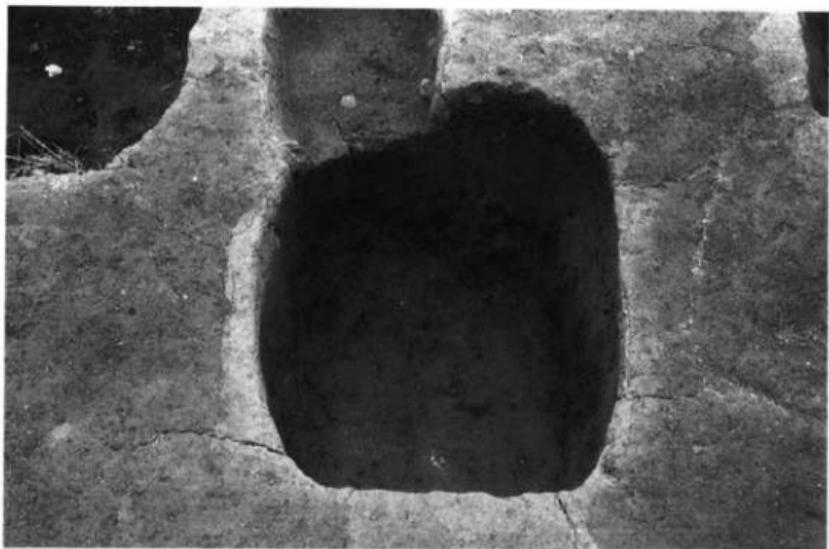
3 地区全景 東から



土壤 1



土壤 3



土壤 5



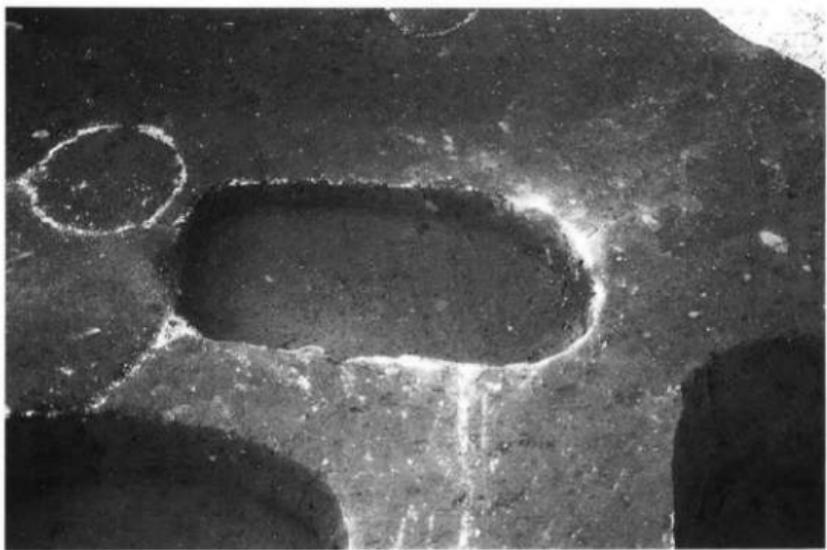
土壤 6



土壤 7



土壤 8



土壤9



土壤10



土壤11



土壤12

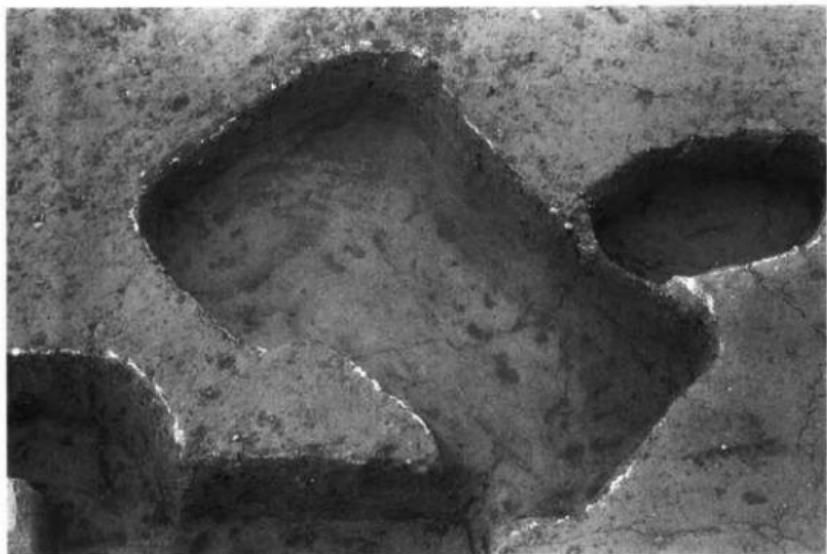


土壤14



土壤14

礫の出土状態



土壤15



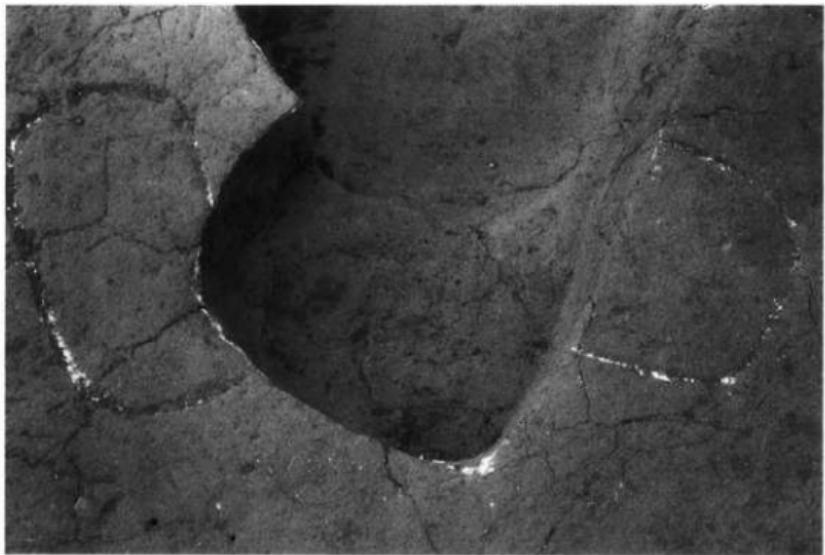
土壤17



土壤19



土壤20



土壤21



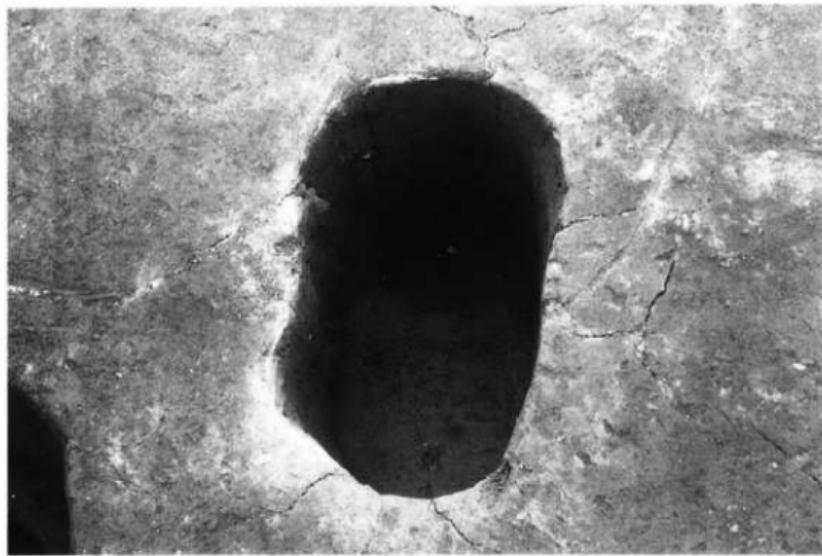
土壤22



土壤24



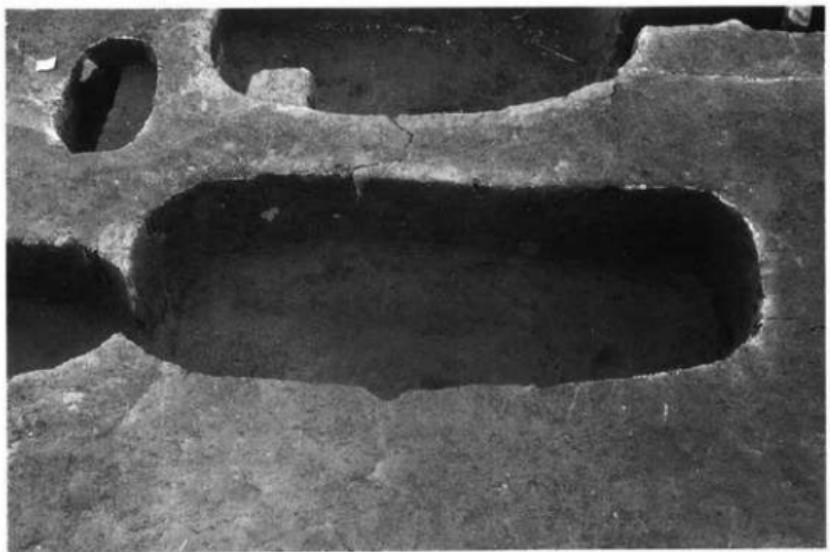
土壤25



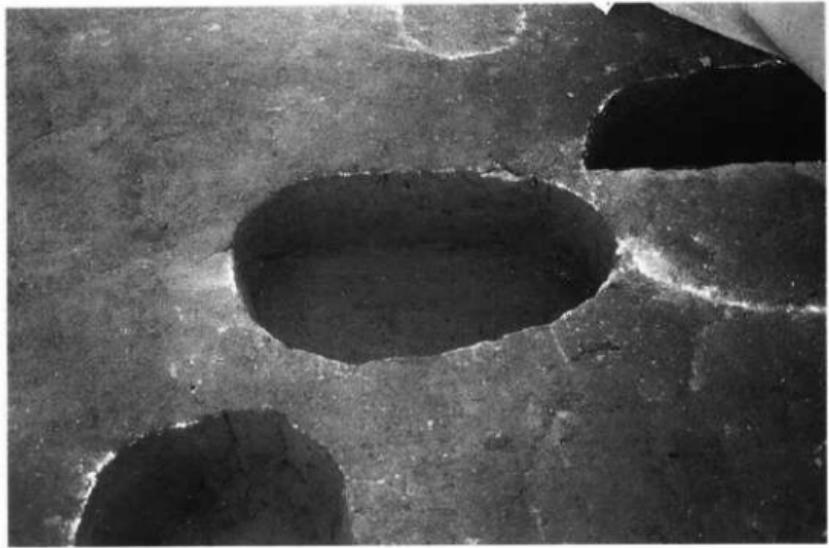
土壤26



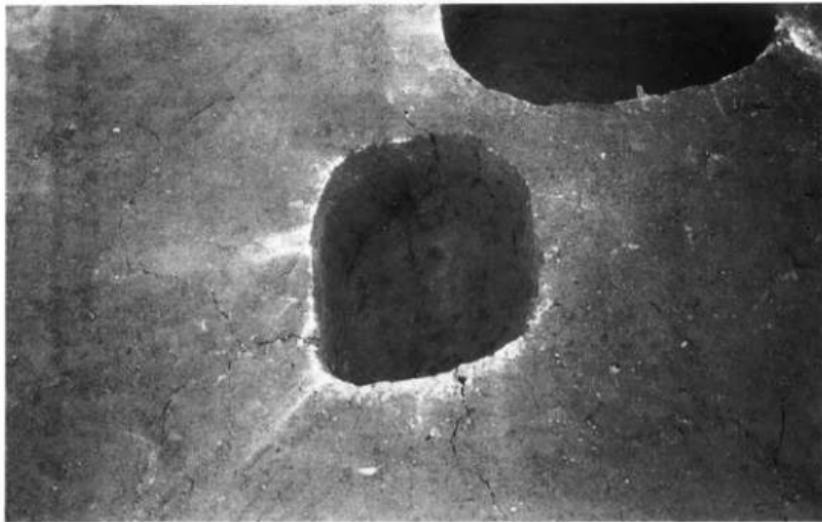
土壤27



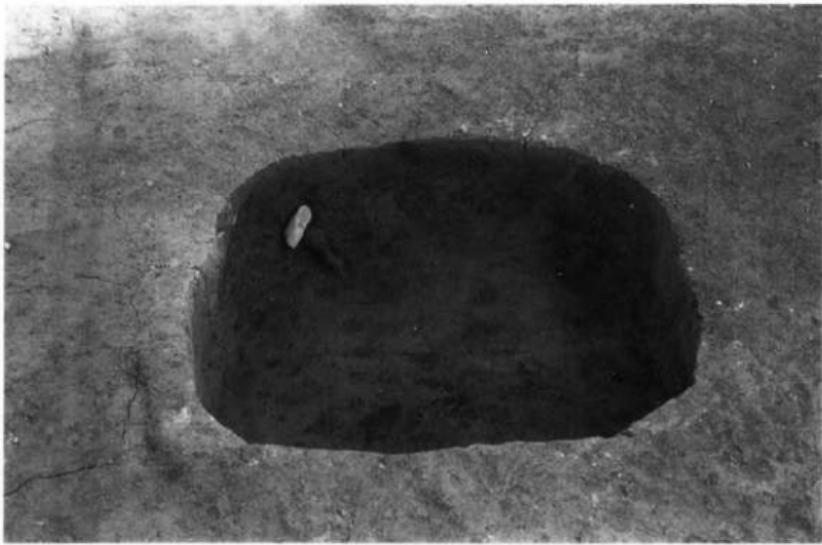
土壤28



土壤30



土壤31



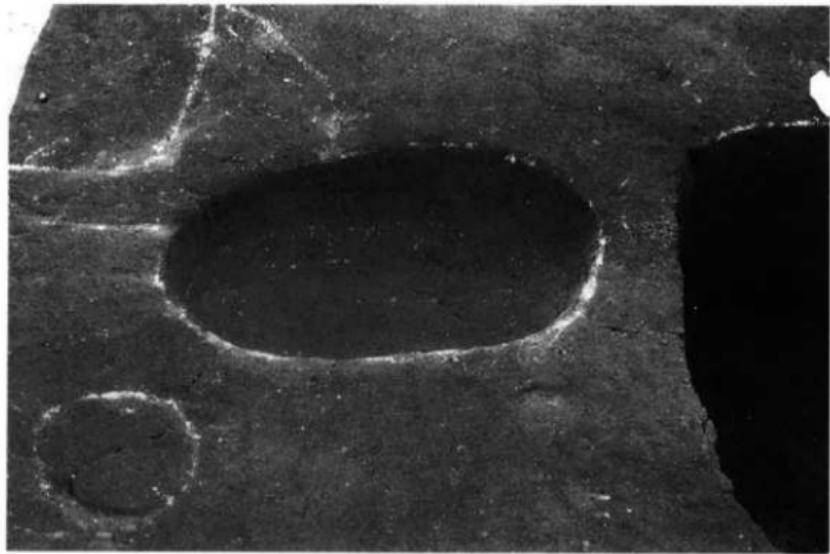
土壤32



土壤33



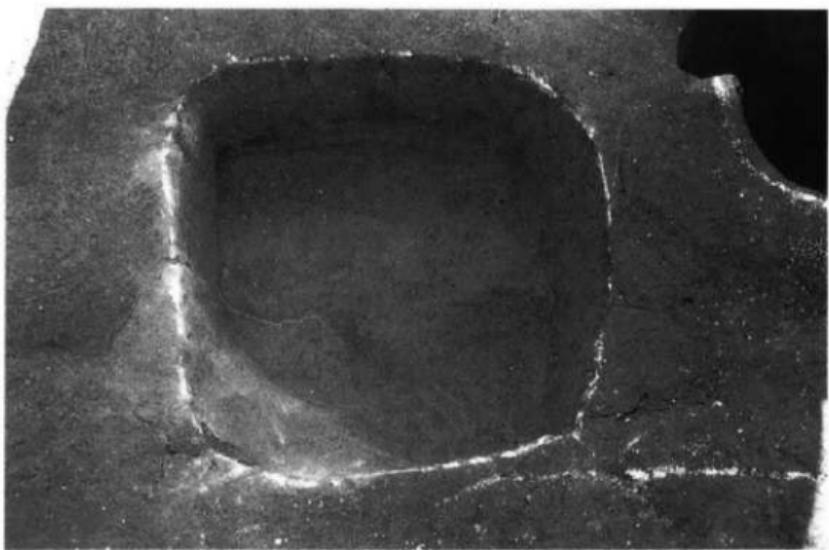
土壤34



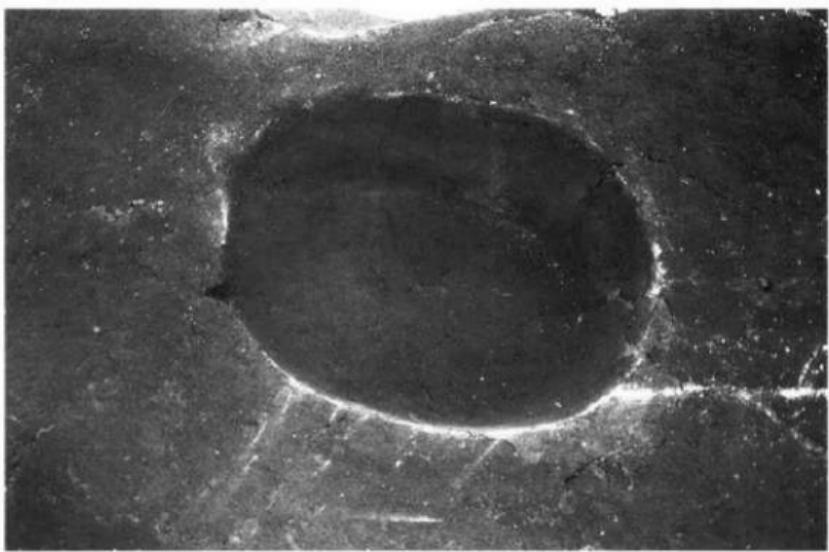
土壤35



土壤37



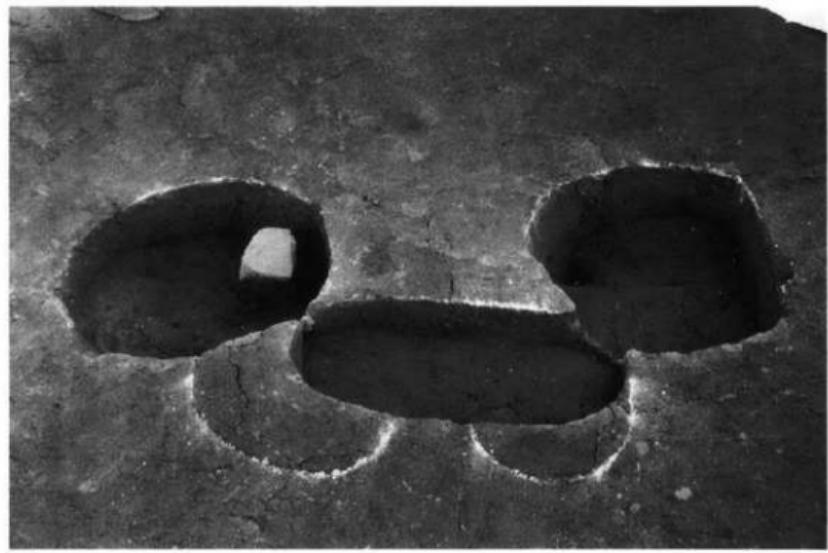
土壤38



土壤39



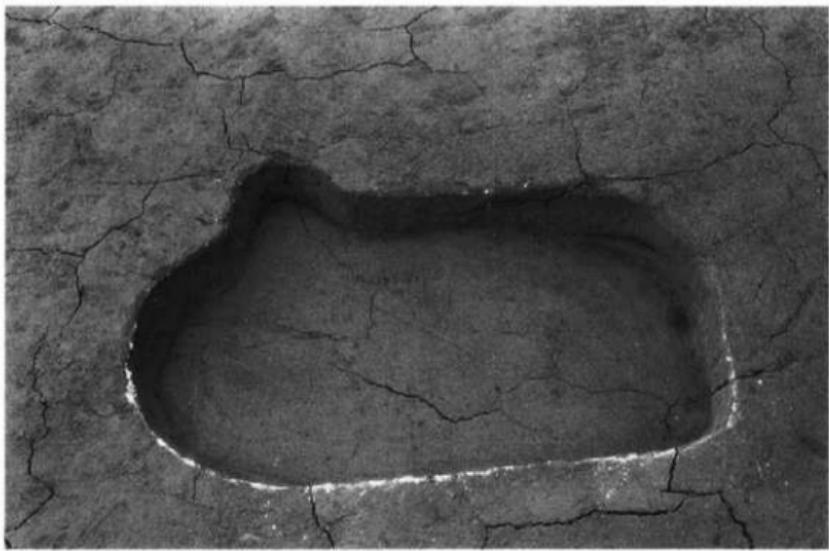
土壌40



土壌41・43・42



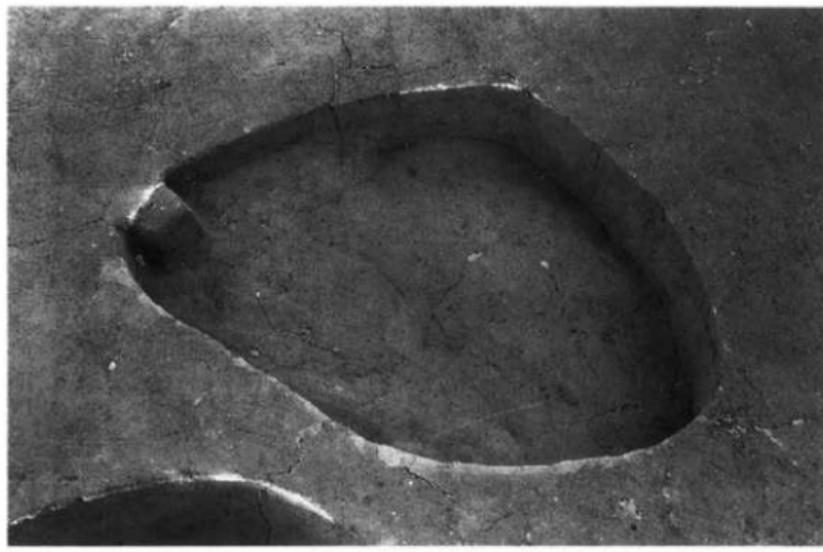
土壤44



土壤45



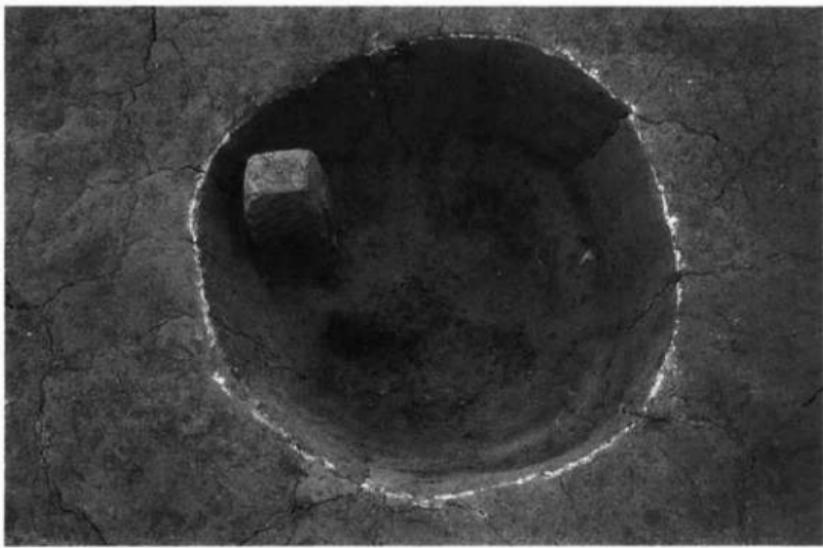
土壤47



土壤48



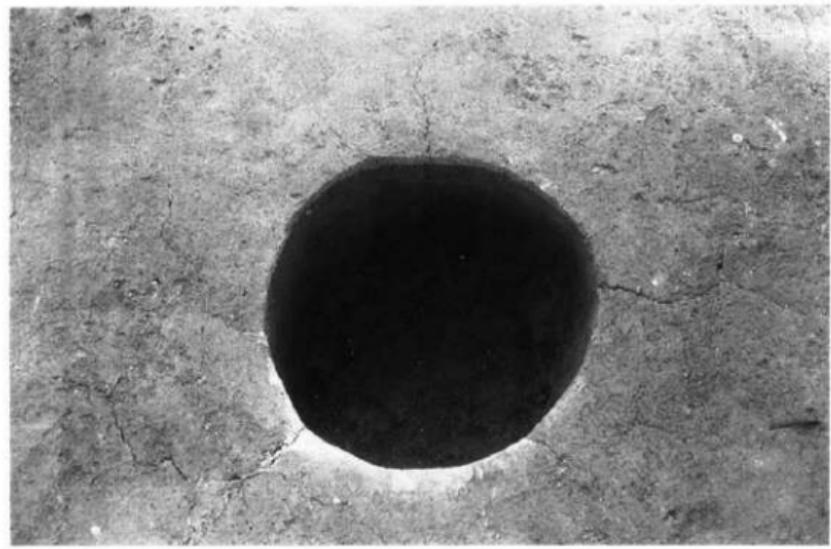
土壤49



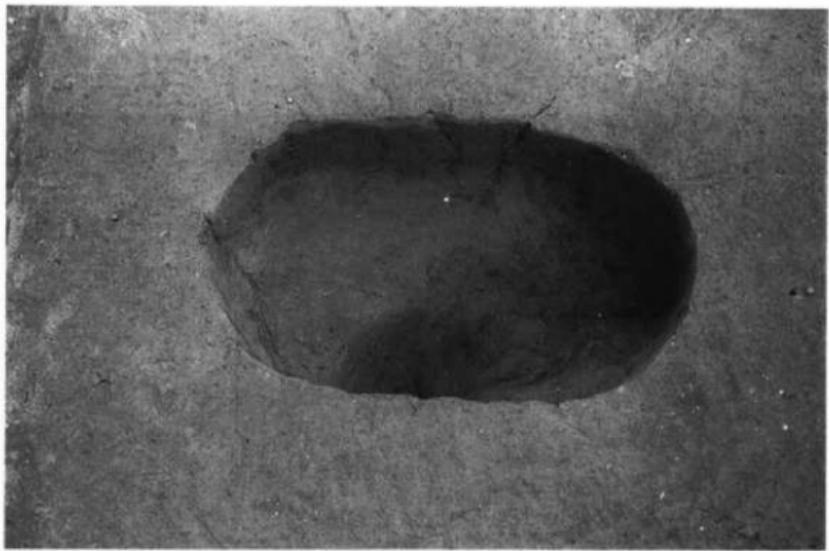
土壤51



土壤53



土壤62



土壤66



土壤67



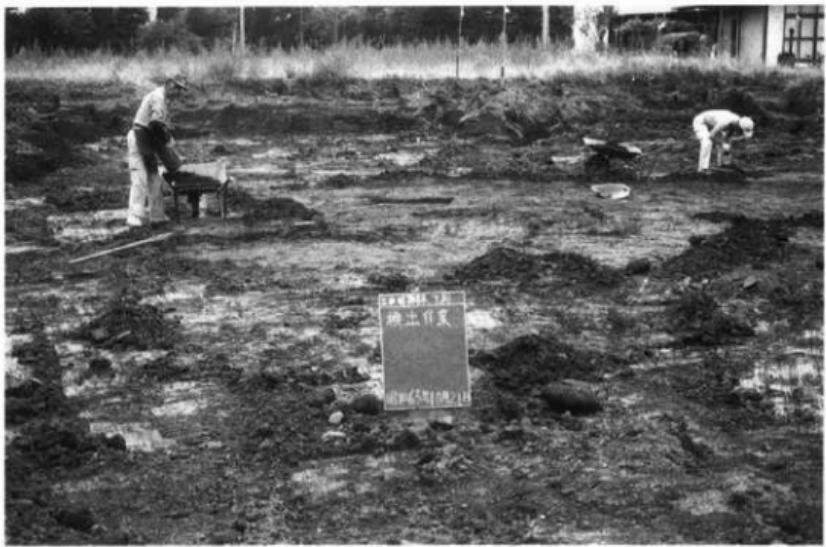
調査開始前



重機による表土剥ぎ



表土剥ぎが終了したところ 南から



排土整理、遺構検出作業 南から



遺構検出作業、試掘溝掘り下げ



遺構(土壌)掘り下げ作業



遺構掘り下げ、測量作業



土塙 1 堀り上がり

深さ70cm近くある

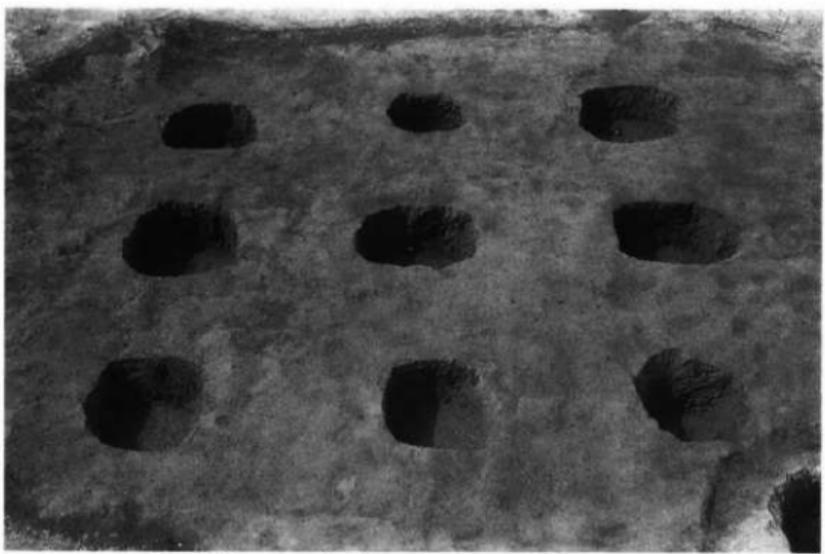


南田尻地籍(SKMT)9住 奥壁側は一段高くなる。



同上 5住、建2

5住の壁高は実に75cm。

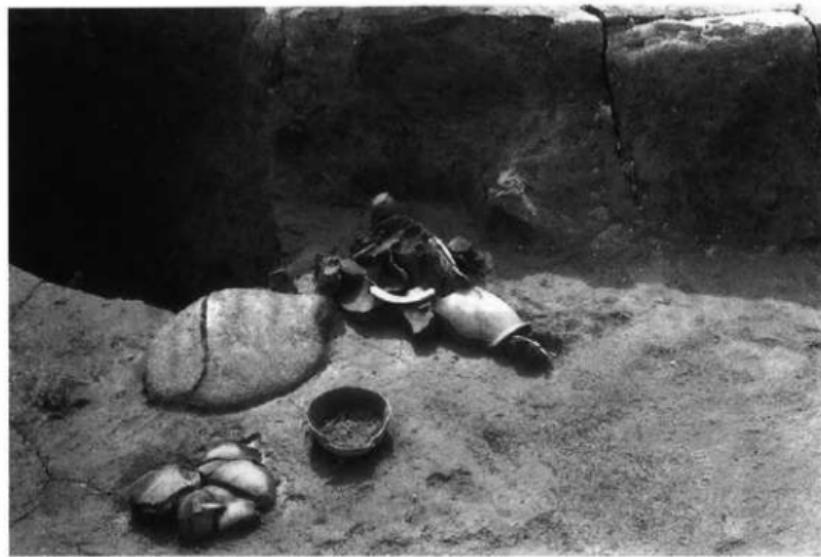


南田尻地籍(SKMT) 建1



同上 7住(部分)

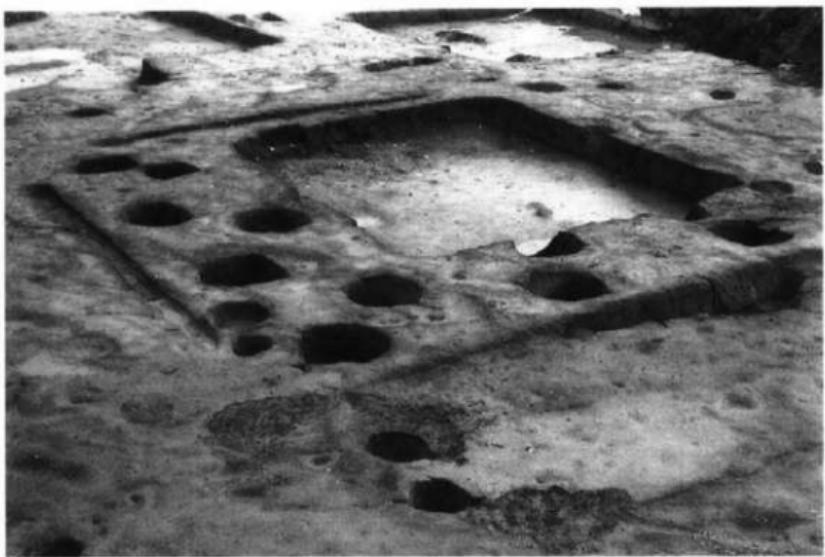
西壁中央(左)と北西隅(右)にカマドがある。
右のカマド前面からは編物用石錐出土。



南田尻地籍(SKMT) 4住遺物出土



同上 調査風景



熊坂地籍(SKKS) 5住に切られる建4・5



笹賀地籍(SKS) 銅鏡出土状況



熊坂地籍(SKKS) 12住遺物出土 底を見せる白い土器は灰釉平瓶



同上 調査風景

手前の未掘ピットは建6・7



熊坂地籍(SKKS) 作業風景



同上 作業風景

奥に見える広場は未検出の中道地籍(SKNM)

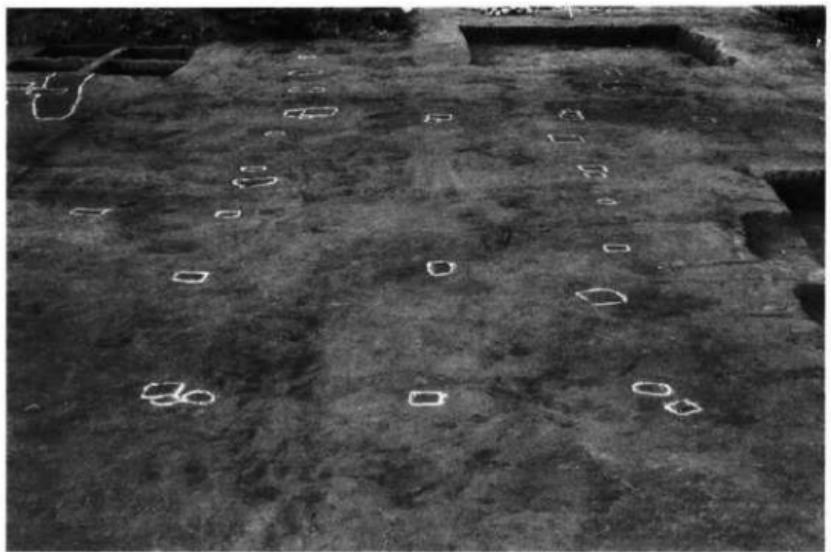


笠賀地籍(SKS) 調査地近影

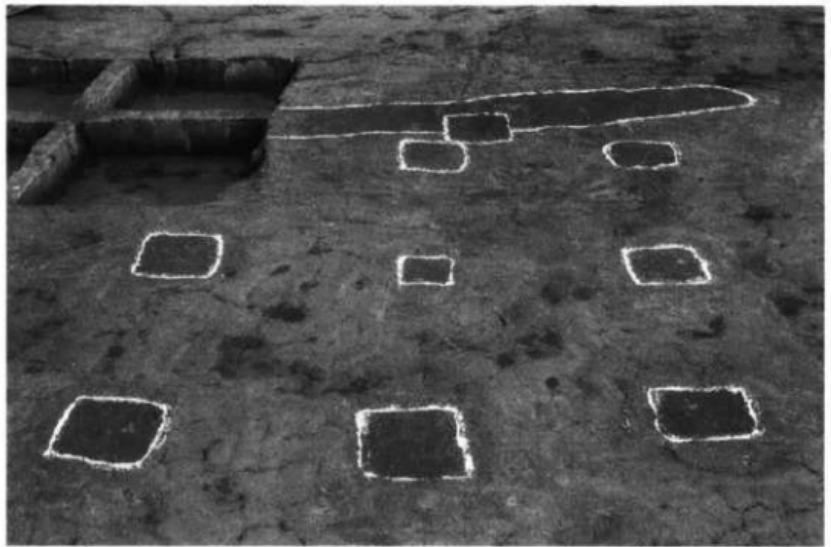
右手前の住居は2・4・5住



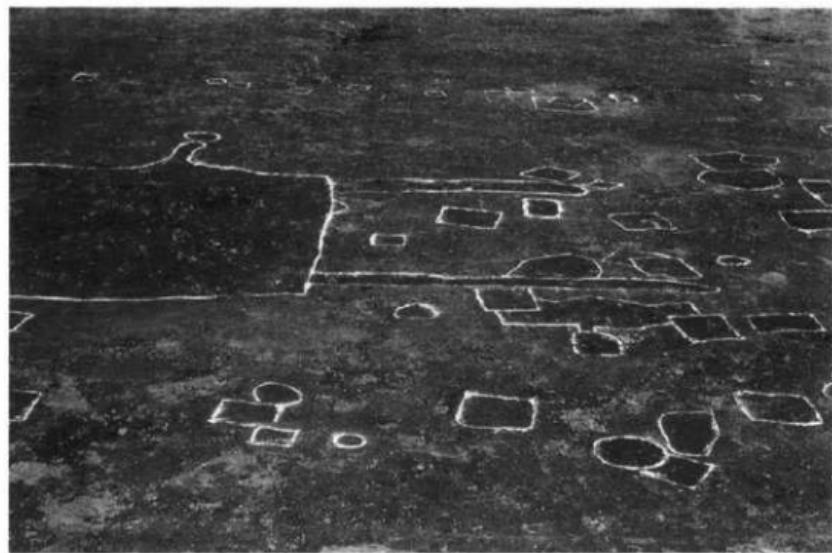
同上 19住、建5~7検出状況



笛賀地籍(SKS) 建3 検出状況



同 上 建2 検出状況 左奥は15住



笠賀地籍(SKS) 19住、建5・6 検出状況



同上 建5・7 掘り下げ 奥に見えるのは18住



笛賀地籍(SKS) 16住横瓶出土状態



同上 溝4周辺調査風景



笠賀地籍(SKS) 調査風景

手前は8住、中央18住



同上 18住掘り下げ風景

18住は $11.3 \times 9.1\text{m}$ という大形住居

松本市文化財調査報告No.72

松本市下神遺跡

平成元年3月20日 印刷

平成元年3月30日 発行

発行 松本市教育委員会

印刷 佛総合印刷
